713
142

0054589000

0054589-000

713－142

木曽民謡集

信濃教育会木曽部会・編

信濃教育会木曽部会

昭１１

AID

木曾民謡集

木曾教育部会

正誤表

頁	行	誤	正
六	一	なれば	ならば
二三	一三	とうづき	どうづき
二七	一四	山行唄	草苅唄
四三	一三	ばぐらう	ばくらう
七〇	四	身でも	身では
七一	九	よい娘(ど)だ	よい娘(こ)だ
七二	六	ゐたなら	ねたなら
九三	六	ねんねん	一段上げる
九四	七	ちんころはんまんだ	ちんころはまんだ
一〇三	六	三百兩を	三百兩も
一〇四	四	中納信	中納言
一七三	一	押してけ押してけ	*押してけ押してけ
一七三	八	一なけ二なげ	*一なげ二なげ
一七六	三	誓約	*誓約
一七八	一	決定	*決定
二〇八	二	五〇八・五〇九	五〇八
二二八	七	一九五	一九四

御嶽

77742

序

朝に夕に御嶽の靈峯駒ケ岳の秀嶺を仰ぎ深山幽谷の間に住むで居た木曾の人々が祖先幾代傳へて謠つた民謠は民衆の詩であり音樂であり又鄕土の自然に環境に風俗に溢れる聲である。彼等の情緒生活は此の中に最もよく表現されて居ると云へよう。けれ共それは又時と共に失はれ變化されてゆくことを思ふと其採集の時機が寧ろ今日では遲きを思ふのである。

木曾郡會が鄕土調査の一として本調査を始めたのは昭和八年四月であつた。爾來歲月を經る三年有餘漸く今回の調査を一先づ完了し木曾民謠集と題し上梓の運びとなつたのである。元より完璧を期したものとは言ひ難いが古來より傳承されたもの〻大略は之を餘すことなく採錄し得られたものと思ふ。本書は一に是れ調査委員磯川・山田・橋本・宮川等諸君の絕えざる努力の結果であつて其の勞を多とせざるを得ない。然して本調査が一つ整つた形をして世に出ることになつたのは一に柳田先生の種々有益なる御助言と御注意の然らし

11 36/66 35/396

むるところである。然も本書刊行に際して先生は御多忙中にも係らず特に懇篤なる序文を寄せられ多大の光彩を添へられたのは洵に感謝の他はない。玆に本會を代表して深甚の謝意を表する次第である。一言以つて序とする。

昭和十一年盛夏

信濃教育會本會部會長　原　和海

序

民間傳承の會の會報に、近頃私が提出して置いた民謡の分類案を、一番に採用してくれられたのが、この本會民謡集である。是に序文を書くことは、自分にとつても嬉しい記念である。

民謡などを集めて何にするといふ疑問は、今でも折々聽き、又さう簡單には答へ得られない難問だが、本會の生活に體驗ある人々だけには、必要はすでに討議の域を越えて居る。歌によらなければもう知ることの出來ない昔が、年と共に多くなり、それも汽車自動車や電氣の速力を以て、見る〳〵散逸し又變化しようとして居るからである。理由は此本を讀みながら、もう一度靜かに考へて見ることゝして、先づ無くなるものを取留めて置かうといふ、この卒直なる態度にも同感が持てる。私の見る所は正しいか否かを知らぬが、とにかくに他日の讀者と共に、出來るだけ多くの利用價値を、この中から見つけ出さうといふ趣旨の下に、こゝに若干のやゝ新しい解釋を試みる。さうして是が又編纂者の辛苦に

對しての、殊に適切なる感謝の方法だとも思つて居る。

木曾は何人も知る如く、珍らしく大きな天然の渡り廊下であつた。國のまん中といふ言葉が是くらゐ精確に、當つて居る土地も外にはさう多くない。風・渡り鳥・水の流れ以上に、遙かに雄大なる文化といふものが、古來たゞ此一筋を貫ぬいて、南し又北して居たのである。眼に見る形としては明け暮れの旅人、或は馬駕籠の雜然たる繫がりに過ぎなかつたけれども、それが暗々裡に負搬して居たものには、系統があり層があり又時代色があつた。廊下であるが故に永く一所に止住せず、しかも大海の航路や曠野の足跡とはちがつて、常に左右に在るものと、何等かの交渉をもたずには行かなかつたのである。氷河が雪を運び寒さを移し、且つ色々の山の小石を持つて來るやうに、隱れて殘り留まるものも搜すならば必ず見つかる。現に古きを誇りとする村々の寺でも名家でも、何れも或時代のデブリスでないものは無かつたのである。

あらゆる一國の文化の中でも、歌謡は脚あつて衢を走る如く、流行の特に速かなものと考へられて居る。新らしい律と言葉は、忽ちに古い好みを壓して、背後に押し遣り忘れ去ることは、今日の常の法則とさへなつて居る。しかも我々は前代の木曾の驛路に、森閑とした夏の眞晝があり、更に又長い淋しい冬の爐端の夜が、あつたことを考へて見なければならぬ。天下に名を知られた谷底ではあるが、其住民の大半は旅と關係が無く、世間をただ側面から眺めて、どこへも動かない產業に携はり、彼等は彼等だけの生活興味をもち、又獨自の歌の需要をもつて居た。さういふ人たちが時あつて町に降り、もしくは草刈り畠を打つ手を休めて、目を留め耳を傾けて居たさま〳〵の世の音なひの中から、或ものは笑つてやがて忘れ、又或ものは覺えて來て、永く家々の語り草として居たとすれば、是も亦一種目に見えぬ木曾の闘であつた。この選擇の間からも窺ひ得られるのは、諸君御先祖の立場であり、乃至は趣味であり情操であつたと、言ふことは出來ぬものであらうか。仲仙道の人通りがどの樣に肩摩轂擊であらうとも、こゝに住む民に歌を愛するの癖が無く、しかも自在に活用するだけの才能が無かつたならば、是ほど充實した木曾民謡集を、今頃集めて世に傳へるなどゝいふことは、まづ不能だつたらうと私は思つて居る。

汎く日本の民謡史を考へて見ようといふ者の爲にも、此書は偶然に大切なる資料を供し

て居る。木曾の一水域には限らず、異郷人との接觸の多い土地には、別に民謡の新たなる用途が、二つは尠なくとも附け加へられるのを常として居る。一國全體としての發達の上にも、此傾向は可なり明かに看取せられるが、その一つは踊り唄で、是は眼に見えぬ邪惡を追却する爲に、人の元氣を統一する必要から、迫々と數多く又面白くなつて來たらしく、今一つは酒盛り唄で、此方は見知らぬ人と親しみ、互ひに心を置かぬ盃を取り交す爲に、揃へて置かねばならぬ勸酒用のものであつた。勿論後々は其面白さに絆されて、用も無いのに鼻歌に之をうたひ、或はわざ〳〵其機會を構へもしたが、本源に遡つて見ると、木曾が東西交通の衝であつたといふことが、夙くから二種の歌の必要を感じさせ、又是を此頃のやうに盛んならしめたのである。今でも信州人がよく酒を飲むのを、寒いからだと無造作に言つてのける人があるが、もつと寒い土地でも一向に飲まない處もある。つまりは木曾の衆が踊を自慢にすると同じく、面白かつたから流行つたといふ方が自然で、是を面白くしたのは卽ち歌の力であつた。よいか惡いかを決するのは敎育者たちに賴むとして、とにかくに是が鄕土の現實の歷史と、深い交渉のあつたゞけは斷言して妨げがないやうである。

それから今一つ、民謡が女性に與へて居た感化の、重要なものであつたことを考へられる。踊りにも酒盛りにも、婦人は未だ曾て發起人となつたことは無いけれども、彼等が歌を愛し又之を理解するさかしさに至つては、恐らく男子にも立ち優るものがあつた。さうして彼等の智能が弘く、感情の豐富となるにつれて、次第に美しく又含蓄の多い民謡が生れて來たのである。新しい歌の作者なり取次人なりは、多くの場合には男であつたらうけれども、其背後には默つて聽いて居る異性の選擇が、可なり敏活に指導して居たことは、小鳥や鳴く虫の社會も同じだつた樣に思はれる。この進歩の段階が、土地毎に異なつて居るのである。さうして又個々の民謡集の中から、大よそは其歷史の、古さ新らしさをも察することが出來るのである。たとへば外來の流行唄に心醉して、不斷にもよそ行きにも、仕事唄にも又鼻唄にも、すべてさういふ新らしいものばかりを、採用しようとするのも一つの時期である。さうかと思ふと踊りや酒盛りの面白かつた歌を記憶して、ちがつた場合にも歌つて見ようとするだけの才覺は示しつゝ、一方土地に生れた昔風の歌でも、好いと思つたものは何度でも取り出して、しみ〳〵味つて見るだけの餘裕と同情とが、備はつて居る

郷土も稀なりとせぬ。木曾などは多分その第二の方の例であらうと思ふ。斯うしたやゝ亂雜にも近い新舊の交錯こそは、祖先の心意を探り求める、大切な一つの手掛かりであつたのである。折角苦勞をして是だけのものを集めて置きながら、これを無意味の偶然でもあるかの如く、見過ぐしてしまふのは惜しいことである。現代の世相は歌が職業となり、歌はぬ女性といふものが日に増して多くならうとして居る。彼等をもう一度聲高く歌はしめることは、幾ら靜かなる木曾の谷でも、恐らくはもう望み難いことであらうが、是が爲に以前我國の民間文藝に參與して居た人々の、優雅なる心しらびまでを、忘れてしまひたくはないものである。私などの見た所では、民謡集の使命として、是以上に意義の大きなものは他には無いと思ふ。如何なる記錄の中にも書いて無い昔、しかも切々として我人の共に知らむと欲するものが、僅かながらも此中からは親はれる。もしも此點に讀者を心づかしめ得なかつたならば、勞多かりし三年有半の採集事業も、必ずしも成功とは言はれまいと思ふ。

昭和十一年七月

柳田國男識

凡例

一、木曾民謡集は、木曾地方で唄はれてゐる民謡を採集し、その結果を整理編稿したものである。同時に童言集も採集し、附錄として載錄することゝした。

一、採集した民謡の數量は、二千を越えたのであるが、本集ではそれを整理して九六三としたものである。

一、分類については、柳田先生の分類案によることゝした。

一、曲譜を入れたいと思つたのであるが、次の採訪にゆづることゝした。節の名のわかるものは、括弧内に註記しておいた。囃子も簡單な二三を除いては入れることが出來なかつた。

一、踊りのあるものは、どうかいふ形でつけ加へたいと思つてゐたが、次の採訪に讓り、童言葉のみそれに伴ふ遊戯や所作を簡單に註記しておいた。

一、分布について特殊と思はれるものには、その地名を括弧内に註記したのであるが、そ

の地のみといふものは甚だ少く、その附近に多いといふ意味である。

一、訛誤其の他で意味を汲みにくいものもあるが、姑くそのまゝとしておくことゝした。

一、本集の採訪に當つては、なるべくこの土地に發生した民の唄といふものに重點をおいたのであるが、他地方のものと思はれるものでも、古くからこの土地の人々の口に上つてゐたものは、併せて採錄することゝした。

目次

序……柳田國男
序……
凡例……
民謡……
一　田唄……三
田打唄……三
田搔唄……三
苗取唄……三
田植唄……四
田草取唄……七

稻刈唄……八
二庭唄……九
臼摺唄……九
（附）臼挽唄……一一
麥搗唄……一〇
粉挽唄……一一
糸取唄……一一
地搗唄……一三
三山唄……一六
○山行唄……一六
草刈唄……一六
○杣唄……一八
茶山唄……一九

四業唄……二〇
大工唄……二〇
○木挽唄……二〇
綿打唄……二三
茶師唄……二三
酒造唄……二三
紙漉唄……二四
五路唄……二四
馬追唄……二四
木遣唄……二五
六祝唄……二四
座敷唄……二五
嫁入唄……二三
酒盛唄……二四

立酒唄……五八
物吉唄……五八
七祭唄……六一
宮入唄……六一
神送唄……六一
八遊唄……六三
鳥追唄……六三
正月様……六三
踊唄……六三
九童詞……九〇
子守唄……九〇
遊ばせ唄……九〇
手毬唄……九三
御手玉唄……九七
一二八

童言葉
一遊戯語……一三九
羽子突……一三九
おはじき……一四〇
いざやいざや……一四一
此處はどこの細道……一四一
凧あげ……一四二
青山土手から……一四三
てこてつたいな……一四三
一かけ二かけ……一四三
草履かくし……一四四
縄飛び……一四四
ちゆう〳〵鼠……一四七
つぼどの……一四八
一四九

目次

中の中の……一四九
かごめかごめ……一五〇
大かん小かん……一五一
七來い八來い……一五四
おこんさ……一五五
孤遊び……一五八
今年の牡丹……一六一
坊さん坊さん……一六三
鬼ごつこ……一六三
かくれんぼ……一六五
坐り鬼……一六五
お禍籠ぎちぎち……一六五
米つき粟つき……一六六
お月様……一六七

尻まくり……一六七
にらめつこ……一六八
上り目下り目……一六九
ぽこぺん……一六九
手つまみ……一七〇
種蒔き……一七〇
ぺろぺろ神……一七〇
指輪まはし……一七一
羅漢さん……一七一
押してけ押してけ……一七二
一なげ二なげ……一七二
月か闇か……一七三
拳……一七四
誓約……一七六

目次

決定……一九八
歎取り……一九九
二　言ひぐさ……二〇一
呼びかけ詞……二〇二
（附）擬聲語……二〇三
嘲語……二〇五
舌もぢり……二〇六
戯語……二〇九
（附）尻とり語……二〇九
註……二一四
卷末小記

民謡

田唄

田打唄

けろさ　長鎌言葉がけ　けろさ其の日の一役者

田振唄

こんな張様の長助成でもあれば　こんな苦勞はせまいもの

苗取唄

一枡七薛　時家南仕事　仕事すりや又枡がとぶ

田打唄、田振唄、苗取唄

四 苗をとるかよきのぼり苗を　人が二把(五把)とりや三把とる
五 苗は取り様できのぼり苗よ　代は山代植ゑられぬ
六 苗をとるとる苗田の稲子よ　どこへ宿るやこの田の稲子よ

田植唄

七 腰の痛さやこの田の廣さ　四月五月の日の長さ　植ゑておけども　この田の稲の出穂を見るやら見ないやら
八 お手をかざしやれ隣の衆よ　今日は田植ぢや田の水ぬるい
九 五月三十日泣く子がほしや　畦に腰かけ乳くれる
一〇 二百十日に風さへ吹かにや　親子三人寢て暮す
一一 上れ〳〵と蛙がなくに　おれの旦那は耳ないか
一二 今年や豊年穂に穂が咲いて　畦の小草も米がなる

一三 おもしろいぞへ五月の田植　みのと笠とが後ひさり
一四 さいとりさしはどこへやら　お江戸はどこが宿だやら
一五 土手の蛙のなくのも道理　水に逢はずに暮さりよか
一六 七つ過ぎればどんぴき様の　お眼があぶなうて植ゑられぬ
一七 ちよんぼ〳〵と植ゑたいけれど　どんぴき様のお眼があぶなうて植ゑられぬ
一八 上の田圃にやお十七ばかり　下の田圃にや婆ばかり
一九 かゝさもらふならでかいかゝもらへ　二百十日の風よけに
二〇 かゝさもらふよりや田を作れ　いつもお米がとれまする
二一 植田の中で寢ろねろと　ねまいもの　植田は菩薩田の神よ
二二 揃ひましたよ十七八が　今日を田植と着かざつて
二三 山極寒いとこちやの　賤母(地名)お山の吹きおろし　(田立)
二四 米といふ字を分析すれば　八十八夜と書いてある
二五 切れた草鞋も粗末にならぬ　もとを尋ねりや米の木だ

二六　お前となれば河原でも　石疊より來る波を枕でも

二七　こゝにかうして植ゑたる苗は　八月末には實を結ぶ

二八　この田の中に殿がこざらにや　おめでたうござる太郎次殿

二九　これを植ゑてどれ植ゑる　太郎次の松原まんだ五反だ

三〇　子持の田植はおもしろいものだ　おんだりおろしたり　せんずりあげたり（黒川）

三一　太郎次かつくらすおかたはた織らず　蓑に袖つけ　のや太郎次殿（黒川）

三二　何がうまいものよ　道ばたのさいちごとごみがうまいもの　太郎次の小娘つぼへは
いつたよ　ひざをつきぬけみのへでゝゆく（黒川）

三三　田のぢの大まらで梅をなぐいた　梅はばらばらまらは木のうら（黒川）

三四　坊様のくせに子を孕ませて　奥山に子ばらし草を取りにゆき　子ばらし草は枯れて
ない　墨染の衣を燒いてのませう

三五　おめでたや太郎次殿の笠のはに　黄金花咲く　黄金花咲きやおめでたや　倉建てめ
されよ七並の倉を

*田草取唄

三六　切れた〳〵と一目に見せて　沼の浮草根は切れぬ

三七　忘れ草なら一本ほしや　植ゑてそだてゝ見て忘る

三八　わすれ草をも植ゑては見たが　後におもひの根が殘る

三九　みんな嫁とる婿とるそうが（さう言ふ）　わしは田畑で草をとる

四〇　青田中から木曾節もれる　鈴の樣なる乙女聲

四一　この秋は雨か風かは知らねども　今日のつとめの田の草をとる

四二　草を取るよりや酒でも飲んで　樽を枕にねるがよい

四三　幅はこまかくうねまはひろく　笠のひもをも結ぶ間を

四四　草をとれとれ稗をとれ　米をとるなら稗をとれ

稻刈唄

四五 今日は旦那の稻刈りぢや　小束にひつからげてちよいと投げた

庭唄

臼摺唄

四六 臼は挽き役手に肉刺(まめ)できる　忍び夜づまは門(かど)に立つ
四七 臼の輕さよ相手のよさよ　相手代るな明日の夜も
四八 挽いておくれよ一はまなりと　ひけばわたしの肩やすむ
四九 挽いておくれよ一はまなりと　可愛い殿さの肩やすめ
五〇 臼を挽きやこそお前のそばで　あいにや見るばか思ふばか
五一 相手のよさや相手がよけりや　臼はしゆて〳〵たゞ廻る
五二 今年や世がよて穂に穂がさいて　枡はとり置き箕ではかる
五三 臼の廻る程仕事が廻りや　倉を建てます穀倉を

五四　臼は挽きうすねどりは殿さ　臼のまひ様はごまのまひ
五五　臼よ廻れよざんざとおりろ　かけた襷の廻る程
五六　臼よ廻れよざんざとおりよ　明日はお客をたてたいに
五七　今宵するすはどんどとおりろ　可愛い主さがねて待ちる
五八　後生願はゞ臼挽なされ　二升と三升挽きや五升となる
五九　おさめ〳〵は七つのおさめ　米のおさめに花が咲く
六〇　臼は挽けども燒餅やきの　婆さしはいか粉ないか
六一　寢ても起きても籾かぜ〳〵と　かぜで食はりよかこの籾が
六二　朝も疾うから籾かぜ〳〵と　えらい姑のつとめかや
六三　きりゝきりゝと廻れよと臼　末にひきあけやすませる
六四　臼を挽くうちや氣兼の山で　ひいてしまへば棒まくり
六五　臼のやりびきやようとげません　とろり〳〵とひかまいか
六六　よんべよばひに粉なめられて　今朝の茶の子に恥かいた
六七　臼のたくりびきやよし心得た　わしにひけとの事かいな
六八　來るか來るかと待つ夜は來ない　待たぬ夜は來てかどに立つ
六九　婆さねないか粉取りやしない　あとで燒餅ややきやしない
七〇　今夜こうせんひきたくないが　明日の茶の子のあてがない
七一　臼よ廻れよ台所までも　とんとまたいで庭までも
七二　今宵するすはもうしれたもの（臼元今きれまする）　婆さ夜食の鍋かけろ
七三　嫁とむことは石臼育ち　いれて廻せば粉が出來る

（附）

*臼挽唄

七四　うたをうたへや眞實とうたへ　歌は心の花ぢやもの
七五　神の御國のこの日の本に　生れいでたる嬉しさよ
七六　神の御末のそのたね繼て　人と生れし嬉しさよ

七七　人といふもの尊いものよ　人になるのが神の道
七八　天の岩戸のあなおもしろの　鈴の御音の尊さよ
七九　五十鈴眞鈴や驛路の鈴に　悪魔障碍は近よらず
八〇　祓よめとは春日の神の　あつき恵の御をしへぞ
八一　悪事災難罪事科を　祓よみてぞはらひさる
八二　思はざりきのあやまりごとも　積りつもれば科となる
八三　庭の木の葉も心の塵も　はらひはらへどまたつもる
八四　天津御法の直日の影で　罪の消えるは人しらぬ
八五　今日の天照日の御神を　祭りいのれよ天が下
八六　物の出來るは八日の神よりぞ　御月祭りは十五日
八七　廿八日御星の祭り　はらひ清めて身をいはへ
八八　廿三夜と八日の月を　待つは女の身のいのり
八九　神の定めの一六日は　壽命福徳うくる日ぞ

九〇　夏至や冬至や彼岸の節は　心清めて日を拜め
九一　猿田彦待には　七色菓子の外に備へよ　白餅を
九二　庚申の夜雞まであそべ　盤上糸竹さまざまに
九三　甲子の日は大己貴命祭り　御饌に備へよ里米を
九四　己巳の日は倉稻祭　御さけ備へよ赤飯を
九五　甲子巳待をよくつとむれば　おもふ願は叶ふとよ
九六　旅へゆく人道祖の神を　祭り祈りて門出せよ
九七　神の長田の稻穂の末と　朝飯夕飯を載けよ
九八　衣裳着るのは齊機殿の　神の御衣の影としれ
九九　衣にあやある色そめなすは　天の羽槌の神教
一〇〇　鏡とり持ち化粧をするは　天の櫛戸の神のかけ
一〇一　榊折取簪さすは　天の鈿女の神教へ
一〇二　竹をけづりて笄さすは　神の腱の緒たつはじめ

一〇三　紙をすきそめ文かくことは　天の日わしの神教
一〇四　刀脇差刄物のはじめ　天目一箇の神をしへ
一〇五　麻績機織物たちぬうて　あつさこらへぬ神をしへ
一〇六　塩土翁の煮たまひし塩のはじまり　船浮橋の通ひも神教
一〇七　山に生ひ立ち海より出るも　神の惠の種としれ
一〇八　異國島々詐越よりも　物の來るは神の德
一〇九　神の御恩と父母の恩　たとへがたしや海山迄も
一一〇　神は正直誠を照す　正實なければ闇の夜ぞ
一一一　人は正直天事が柱　まことなければ身は立たぬ
一一二　我が心は天照神の　みたまものぞと常に知れ
一一三　我が心に偽あれば　伊勢の御鏡かき曇る
一一四　神の鏡はよゝ思へ　闇も月夜も見るかゞみ
一一五　親を内宮外宮と仰げ　かぎりあらしや孝の道

一一六　親にはつかへ孝行なせば　富も寶もふり來る
一一七　親の仰せに背けるものは　はてん罪科身にむくふ
一一八　主の御影でこの身がたつと　しれば動も苦にならぬ
一一九　たとへ物ごと發明なりと　二心ある人身はたゝぬ
一二〇　善も惡いも噂はうそよ　見るときくとは違ふもの
一二一　忠と孝とを忘れたものは　狗の中でも野良犬よ
一二二　狗は夜を守るとりや時告ぐる　道知らぬ身の哀さよ
一二三　今日の此日に又逢はれぬと　己が仕事をはげめかし
一二四　照らしますこの御影を　知らで暮すかうかうかと
一二五　仁愛深うて正直なるは　神の心に叶ふぞよ
一二六　己が心の横しまごとが　つもり〳〵て罰うくる
一二七　怒る心は破れのもとよ　天靈淳直にしとやかに
一二八　祝ふ言葉も呪詛も口よ　いふな筋なき仇言を

一二九　我と我身をつねつて知れよ　人の痛さは如何ばかり
一三〇　寒いひだるい心の程を　しりて惠めや下々を
一三一　たゝき廻してつかふな人を　使はるゝ子は猶可愛い
一三二　情なかりしその罪咎の　末は身をせめ子にむくふ
一三三　人を苦しめ寶を持つな　やがてその子は門に立つ
一三四　人の奢はどこともなしに　登り〳〵て落ると知れよ
一三五　榮耀榮華程過ぎぬれば　後は悲しむ種と知れ
一三六　欲と色とは水火の二つ　過て流れて家を燒く
一三七　鳥雀のさえづる聲を　聞できくのは皆そむき
一三八　緣の結びは私ならず　能も惡いも神結び
一三九　岩笑帶とて五月ならば　帶を結びて紐とくな
一四〇　月のさはりは七日の間　心かためて帶とくな
一四一　丙午の日庚や申に　帶を解くのは身の毒よ

一四二　地震上鳴大風吹は　天の怒りと恐れみよ
一四三　二十四節の其時々は　骨の繼目とつゝしめよ
一四四　四季の土用に　北斗を拜む人に　身に咲く金花
一四五　酒は至極の藥といへど　過りや其身の毒となる
一四六　我身堅固に長生きせずば　生れ出たる甲斐もなし
一四七　有とあらゆるそのことごとを　知ろと思ふは皆迷ひ
一四八　我と我身の行狀しるを　これを物知る人といふ
一四九　家業精出し實義なもの　人の見る目の鏡なれ
一五〇　たとへいか樣のことありとても　道に迷ふな邪道へ
一五一　儒道佛法二つの敎　これは中頃來たものぞ
一五二　國の敎をいやしむ人は　酒に醉ひます唐土酒に
一五三　神の咄に腹たつものは　おやをお經でたゝくのか
一五四　明日の事より今日こそ大事　後の事より今の事

一五五　寺や道場は先祖の靈家　祠堂とかねて知れ
一五六　忌日命日その亡靈を　涙こぼして手向けせよ
一五七　神の御恩と先祖の影で　此身暮すとこゝろえよ
一五八　神や佛になろとは迷ひ　兎角誠の人となれ
一五九　人のかたちは皆人なれど　道にたがへば人でなし
一六〇　梅に櫻よいろ〳〵花に　うつり安しや人心
一六一　脇目ふらずに敬ふものは　國の主と我夫
一六二　世界萬國國土はあれど　日本ほどよい國はない
一六三　東夷粟散邊土といへど　君子國とて並ない
一六四　日本の烏が日赤日明と　鳴は支那の烏に習ふたり
一六五　國の開闢をしへの道は　神の御文に明けし

一六六　祝ひうたへよ先日の本に　年のはじめの神祭るのは
一六七　天の岩窟に影はしめ　今もかはらぬ神の國
一六八　稔のはじめの折うつるとて　祝いたゞく其源は
一六九　諸冊の二神の二尊の瓊矛の先に　落ちてかたまる淡路島
一七〇　稚くむすびの神祭るのは　正月七日の若菜粥
一七一　二季の社日に田畑の神を　祭りや穂に穂が咲くと知れ
一七二　桃の節句は粟島樣を　女夫祭りの雛飾り
一七三　八十八夜に御日待すれば　夏の病をよけるとぞ
一七四　卯月八日は花生立てゝ　花の祭りの魂よろひ
一七五　五月五日は武具飾り　神の教の跡ぞとよ
一七六　夏越祓は千歳の命　延とこそきけよく祈れ
一七七　天の棚機姫樣は　衣物はじめの神なれば　糸け捧げて祭おけ
一七八　生見魂とて指鯖おくる　親子おとゝひ身をいはへ

一七九　盆の踊は門火を燒て　黄泉門塞神祭り

一八〇　二百十日に吹風毒よ　龍田廣瀬の神祈れ

一八一　八月朝日田の實の祭り　初穗さゝげてよく祈れ

一八二　九月九日白山姫の　ちらぬ命の菊の酒

一八三　亥の子祝へよ富福智惠尊　餅をつきつく福をつく

一八四　神迎へとて社へ參る　是も神代の跡ぞとよ

一八五　十二月中頃煤拂するは　是も神事の備へぞよ

一八六　極月三十日は大歳神の　歳を守りの神の恩

一八七　神の御國ぞ皆人々も　然りいはひて怠るな

麥搗唄

一八八　唄をうたへば麥つぼなりに　中をはらげて末ほそく

粉挽唄

一八九　臼の相手にお十七やよかろ　ひかずひかれず心みる

*糸取唄

一九〇　どうだ糸ひき糸めがでるか　糸めどころかひまが出る

一九一　可愛がられた蠶の虫も　今ぢや湯玉のその中に

一九二　お前十九身も十九　枠の糸どちらが先にたつやら

一九三　上州富岡機械をやめて　さあさこれから人力車

一九四　主は檢番わしや糸取りで　行かうか上州富岡へ

一九五　糸は切れやく　わしや繋ぎやく　承知しながら腹が立つ

一九六　上州富岡なるめろの機械　十七八の姉さんが　紫袴をはき揃へ　絆縮緬襷をかけ揃へ　髪は束髪花ようじ　糸取る姿の程のよさ（讃書）

地搗唄

一九七　今日は日もよし石場が坐る　石場坐れば酒が出る

囃子

オモシロヤ　ヤツサイモツサイ
ソーラヤツサイ　ヤツサイ
ヨイトコナーノヒヨウタンヂヤ　ヤツサイモツサイ
千代ノヒヨウタンヂヤ　ヤツサイモツサイ
ヤツサイモツサイ　ヤツサイモツサイ

一九八　こゝは乾かいぬゐの隅か　おつき納めておめでたい

一九九　こゝは乾か乾の隅か　黄金柱が今坐る（千本立つ瓦葺たつ）

二〇〇　こゝはめでたい旦那のお寝間　眞中ついてたのむ

二〇一　こゝは旦那のお寝間の石場　石場坐れば酒が出る

二〇二　今日は吉日石場が坐る　坐る石場がおつがよいほどがよい

二〇三　三の石場は火伏せの御祈禱　お家火難はないと搗く

二〇四　めでためでたのどうづき様は　東枕に納めおく

二〇五　どうづきや何丸　ありや家の丸　搗いてかためてまめ〳〵と

二〇六　こゝのお家の東の破風　あたる夜風は寶風

二〇七　こゝは大事の大黒柱　石の土台の腐るまで腐るまで

二〇八　よいとこさんでははてしがつかぬ　はてし終れば酒が出る

二〇九　こゝは大事の乾のすみか　心おきなくつかしやんせ

二一〇　皆さんうん〻搗いておくれ　つけた手縄の切れる程

二一一　とうづきつきやこそお前のそばで　あいにや見るばか思ふばか

二二　こゝのお家はめでたいお家　いつもどんどと唄の聲
二三　御家繁昌や馬屋も繁昌　内の御亭主尙繁昌
二四　唄の聲する太鼓の音する　あいにや主さの聲もする
二五　さあどうづきよついてたもれ　つけばつく程酒が出る　餅が出る
二六　どうづきつくなら眞中ついておくれ　はたをついては氣が惡い
二七　土手のもぐらもちやまだ若い　どんな石でも持ちやげます
二八　またなくよよいとまいた　さい〳〵やつちきどつこいしよ
二九　今日は吉日石場が坐る　石場坐れば酒が出る　御祝儀出る　二百十日に風さへ吹か
　　にや　倉を建てます米倉を
三〇　こゝは乾かいぬゐの隅か　黄金柱の建つ所　親父大黒かゝさは惠比壽　家の子供は
　　福の神
三一　西行法師の坊さんは　念佛嫌ひで金嫌ひ　袈裟や衣は尙嫌ひだぞーいとこさんよー
　　え
三二　これ〳〵みなさんきいてくれ　こゝは鬼門のすま柱　はりこみつりて下さんせ

山唄

*山行唄

二二三　わしとゆかんかあの山おくへ　うどやわらびの中折りに
二二四　男やごめと南瓜のつるは　人の裏背戸はひたがる

草苅唄

二二五　向ふの山でなくあの鵯(ひよどり)は　朝草苅の眼をさます
二二六　日暮の草苅淋しうてならぬ　なけよ草場のきりぎりす
二二七　起きて行かぬか朝草苅りに　鳥がなきます柴山で　（小木曾）

二二八　嫁と婿との仲さへよけりや　一駄苅る草二駄ん苅る　（末川）
二二九　草を苅るには鎌二提ほしや　わしとお前は(いとし殿さの相鎌を)相苅りを
二三〇　娘草苅り桔梗は残せ　桔梗は女子の縁の花
二三一　鎌も切れゝよ小草もたまれ　今年は(ばかりの草苅りだ)じめの草苅りよ
二三二　あなた苅つだかわしやまだからぬ　共に澤山苅らまいか
二三三　木曾の女子は一目でわかる　麻のこいのに槍笠
二三四　山へ登れば苅る草だより　家へ歸れば様だより
二三五　こゝで休んで鎌といでいつて　いとしあの子と向ひあひ
二三六　草を苅るならおんまさ山(地名)へ　ゑんど交りのかりやせを　（大桑）
二三七　草を苅るなら寄合渡(地名)山の　小草交りのかりやせを　（奈川）
二三八　草を苅りたきや恩田(地名)の原で　うりやかむぎのあはせ苅り　（末川）
二三九　草はかるかや苅干よするか　鎌がきれぬかおいとし(まゝならぬ)や　（荻原）
二四〇　聲は細聲細谷おくで　ほけきよ鳥かとわしや迷ひ　（黒澤）

二四一　いとし殿さの草刈る山に　ばらや苺がなけりやよい
二四二　昔なにがし今世に落ちて　根笹交りの草を刈る
二四三　蝉がなく〳〵翁の松で　腰覺（地名）通ひをよせと鳴く　（上松東小川）

杣唄

一四四　わしの殿さは山から山へ　霧や霞のその中に
二四五　東鴨居は切るなよ杣衆　東鴨居は神の木だ
二四六　百姓やめても樵夫はやめぬ　合はせめんばの味のよさ
二四七　杣といふ奴あ腰ばか痛うて　唄は出もせで屁が出るよ
二四八　今日こゝでどう入とは　元締様のおよろこび
二四九　杣といふ字を分析すれば　山と木（ぼく）とのさし向ひ
二五〇　杣山人がきり出いて　大谷小谷を堰ぎ出いて　この木が首尾よく着したならば　元締様のおよろこび
二五一　山で切る木は澤山あるが　思ひ切る氣は更にない

*茶山唄

二五二　娘忘れたか茶の木の下で　くれた簪なぜさゝぬ　（南部）
二五三　遠州濱松よい茶の出どこ　娘やりたやお茶摘みに　（南部）
二五四　若芽摘むならお茶をつめ　赤の襷に檜笠　（南部）

業唄

大工唄

二五五　七つ八つから大工はすれど　人の口には戸はたゝぬ
二五六　大工夫に持ちや木の葉の舞ふも　鋸屑だと思つて見る
二五七　大工頼むよ忍びの戸だに　押せばあく様にならぬ様に
二五八　大工さんにもほれては見たが　双物商賣切れ易い

木挽唄

二五九　七つさがりに双をする木挽　油斷するなよ明日の日も

二六〇　ひけよひつたくれよ三河の木挽　ひかでとらりよか五兩金を
二六一　ひけよひつたくれよ三河の木挽　ひかにや小判の金とれぬ
二六二　ひけよひつたくれよ三河の木挽　ひけば金とる日金とる
二六三　ひけよひつたくれよ愛しの木挽　ひかで妻子が養よか
二六四　木挽やけなるい大名のくらし　前に六尺たてゝやる
二六五　一つ出さんせもとりん様よ　もとで出さねばうらで出す
二六六　飛驒の高山木挽の出場所　親も子も出る孫も出る
二六七　木挽さん達お國はどこよ　國は越後の穴間(地名)です
二六八　兩手合はせて片膝ついて　人の木をひく木挽職
二六九　木挽や一代上らぬ職だ　下れ下れとひきさげる
二七〇　大工可愛や木挽は憎い　仲のよい木をひきはなす
二七一　大工さよりや木挽さ可愛い　そばへ〳〵とひきよせる
二七二　山の中でも三軒家でも　住めば都よ花がさく

二七三　木挽やごと虫木を食つてくらす　山でひかなきや何たべる
二七四　七間三尺親方づとめで　そのあとひくのがあの子の爲だよ　あの子の爲ならこの木も豆腐だ
二七五　木挽木臭い松の木臭い　醫者の娘は麝香臭い

綿打唄

二七六　お前綿打ちわしやよりこより　よくも揃うた手の職が（平澤）
二七七　かう寒くては山は雪　おれの殿さも山越しをして寒からう
二七八　にら崎（地名）宿へ雪が降る　雪にやないものさらしてのごい

*茶師唄

二七九　いくらもんでもこの茶はよれん　お茶の番頭さんまゝおくれ
二八〇　もめ〳〵大葉も小葉も　もめば茶となるお茶となる
二八一　お茶の番頭さん日くらならよいに　早くすましてねむらづに
二八二　ぶうとふいたは茶のせいろ　早くほいろが戀しかろ

*酒造唄

*洗場

二八三　今朝の寒さに洗場は誰か　可愛い主さでなけりやよい
二八四　可愛い主さの洗場の時にや　水も湯となれ風吹くな
二八五　酒屋百日夏ならよかろ　冬の寒さに一人寢る
二八六　酒屋者にはほれるな女子　いつも秋來て春歸る
二八七　酒屋男にやほれるな娘　花の三月出て歸る

二八八　花の三月泣き別れでも　又も逢へます十月は
二八九　いとし殿御は今日何なさる　足がだるからうねむたからう
二九〇　足もだるないねむともないが　わたしやあなたの事ばかり
二九一　娘待つなら半道他所で　送り迎へがおもしろい
二九二　またも待つなら隣で待ちやれ　雨の降る夜は軒傳ひ
二九三　川の鳴瀬に絹機たて〻　浪に織らせてせに着せる
二九四　わしの殿さは筏の船頭　袖がぬれますさす棹で
二九五　坊主山道破れた衣　ゆきもかへりもきにかゝる
二九六　酒といふ字は三水偏に　つくりや清めの酉とかく
二九七　酒屋様かねいつ来て見ても　櫂の音やら唄の聲
二九八　私はづかしはじめの殿にや　月の淀みがしれたとさ
二九九　今宵やかたで今つく添は　酒につくりて江戸へ出す
三〇〇　酒屋さんには何がよくて惚れた　淺黄褌の結びさげ

三〇一　竹になりたや酒屋の竹に　可愛い主さのさゝら竹
三〇二　竹に雀は仙臺様の　御紋中に小鳥がちやちやと
三〇三　中に雀がちやちやすれば　外のえさしがさしたがる
三〇四　さすにさしても殺すなえさし　あれはお伊勢の庭雀
三〇五　これで皆さん一息せうか　馬の眞似して金かまそ
三〇六　揃うた揃うたよ親桶子桶　棚にや尺竹試桶

*山おろし唄

三〇七　目出た〳〵の若松様は　枝も榮える葉も茂る
三〇八　枝も榮えて葉も茂りましや　今に小松と名を名乗る
三〇九　今に小松ぢや（枝が榮えりや）庭先や暗い　暗きやおろしやれ一の枝
三一〇　一の枝折りや二の枝までも　又もおろしやれ三の枝
三一一　三の枝より千咲くつゝじ　竹の二股世のふしに

三二二　竹の二股お元は松に　松に花さく藤の花
三二三　松に下り藤の花手はとゞけども　人の物なら見て通る
三二四　こゝのお蔵はめでたいお蔵　黄金の切り窓錢すだれ
三二五　酒の神様松尾様よ　つくりまします五萬石

*醪搔き

三二六　夜中起きして醪搔く時にや　何も思はず妻の事
三二七　夜中〳〵に廻らにやならぬ　主さお寢間の枕元
三二八　酒屋さんかね元氣が一だ　酒は元氣につれたもの
三二九　宵の醪ずり夜明けの甑　造りますぞいよい酒を

*早播

三三〇　池田伊丹で今搗る醪は　酒につくりて江戸へ出す

三三一　江戸へ出しても名のある酒は　酒は劍菱男山
三三二　酒は劍菱男山よりも　私の好いたは色娘

*醪物

三三三　とろり〳〵と馬に鈴下げて　春はごされや伊勢詣り
三三四　御伊勢詣りて宮めぐらずば　長の道中で雨が降る
三三五　ながの道中で雨がふるならば　私の涙と思うてくれ
三三六　御伊勢詣りてこの子が出來た　お名をつけましよ伊勢松と
三三七　松とつけまいわが子の名をば　まつはういものつらいもの
三三八　伊勢の本社は三社か四社か　裏へ廻れば四社五社と
三三九　伊勢の本社は八棟造り　お臺所がこけらぶき
三三〇　伊勢の津の様な大社の神に　なぜか宮川橋かけぬ
三三一　橋をかけるはいと易けれど　神の御馳走に船渡し

三三二 伊勢のつのとの津の神様は　お立ちぶりすりや雨が降る
三三三 伊勢の太夫様麥種育ち　内で年する事はない
三三四 伊勢の太夫様いつ頃ござる　いつも師走の半ば頃
三三五 伊勢の津のとの津のまん中に　咲いたつゝじの色のよさ
三三六 伊勢の津の町長いとも長い　殿と通れば長くない
三三七 伊勢の津よりも松坂よりも　心とめたは關の地藏
三三八 關の地藏さんに振袖きせて　奈良の大佛婿にとる
三三九 奈良の大佛さんをやつこらしよと抱いて　お乳のませた親見たい
三四〇 奈良の春日の便所がこけて　奈良の町中ししだらけ
三四一 奈良の春日のおしゝの鹿の　鹿の白い毛が筆となる
三四二 何とよからうぞ淀通る殿さ　八和田八幡下に見る
三四三 下に見ました八幡の川も　水が流れりや是非もない
三四四 とんで來ますや大阪の城よ　前の淀川船が着く

三四五 前の淀川船がつくために　廣い大阪繁昌する
三四六 繁昌しました大阪の町に　殿にさす様な帶はない
三四七 殿にさす様な帶あるけれど　買うてさす様な夫はない
三四八 とんで來ますりや　早住吉の松が見えますほのぼのと
三四九 松が見えます神崎川に　ちらり蒔繪の帆が見える
三五〇 見えた蒔繪は破れてしもて　今は莚の帆が見える
三五一 なんと莚も帆にかけりや早い　茶やの女が出て招く
三五二 出よとまねかうとなか〳〵よらぬ　娘に押されていそぎよる
三五三 私もよりたい御大社の濱で　船に荷を入れ押せこげ船頭
三五四 船に荷を入れおせこげ船頭　おせばみなとが近くなる
三五五 近くよつたら早めてしもて　終もてのまんせ長酒を
三五六 長門長崎遠い様に思うた　これがおしやんかおめでたい

*三ころ唄

三五七　お日はちり〳〵山端にかゝる　おらの仕事は小山程
三五八　仕事仕まうたらあかりをつけて　親の名づけの妻を持て
三五九　親の名づけの妻さへ持てば　添うて苦労はわしやしない
三六〇　今宵一夜は野にねてなりと　様の行方が尋ねたい
三六一　様が久しいいつ逢うたやら　わしも忘れた逢うた夜は
三六二　思うて通へば千里も一里　逢はず戻れば又千里

*櫂唄

三六三　少し早めて御大社の濱へ　船に身を入れ押せ漕げ船頭
三六四　舟に身を入れ押せ漕げ船頭　押せば港が近くなる
三六五　近くよれよれよつたらしもて　しもてのませうか長崎へ
三六六　永の長崎今朝から待つた　これをつきやげりやおめでたい

三六七　これがつきやげかつきやげの櫂か　櫂に神樂をあげませうか
三六八　櫂に神樂をあげますなれば　松尾様には大神樂
三六九　お伊勢様までお神樂すめば　千秋樂々おめでたい
三七〇　よかろ〳〵と皆様はおしやる　之で收めておめでたい
三七一　唄のしまひは何と言うてとめる　酒屋繁昌と言うてとめる

紙漉唄

三七二　紙のいとくにみこみのこぶは　わすれさいせにや氣が樂だ（田立）

路唄

*馬追唄

三七三　好いた馬方やめろちやないが　やめておくれよ茶碗酒

三七四　こはやせつなや(地名)關谷の坂で　馬の手綱で日を暮す　(西野)

三七五　馬のやせたに高荷を積んで　上りかねたよこの坂を

三七六　馬のやせたに福島(地名)通ひ　案じますぞい長の旅　(妻籠)

三七七　馬はやせ馬のりかけ重い　下りておくれよこの坂を

三七八　馬は三歳馬方二十歳(はたち)　つけた荷までもかたぎやせぬ

三七九　馬は三歳馬方二十歳　案じますぞい長坂を

三八〇　駒は三歳馬方二十歳　つけた鳴輪の音のよさ

三八一　馬は豆好き馬子酒が好き　乘つたお客は唄が好き

三八二　馬方好くせいか鳴輪の音が　どこで聞いても程がよい

三八三　鳥居(地名)峠の山吹ごろし　花はうこぎで葉は淺黄

三八四　木曾を出ぬけて鳥居峠こして　あよびかねたよ桔梗ケ原(地名)

三八五　伊勢に行きたや木曾路の旅は　三寶荒神の仲乘りに

三八六　大平(地名)出がけの吸ひつけの煙草　あの娘思へば火がつかぬ　(蘭)

三八七　一夜二夜まで妻折れ笠の　三度笠から深くなる

三八八　急げ馬方はよこげ船頭　お伊勢參りの長の旅

三八九　馬よ歩けよ歩かにやたゝく　宿の女子が待ちかねる

三九〇　峠の頭のあの風車　誰を待つやらくる〳〵と

三九一　いやみからみは寢覺(地名)のそばだよ　おいておくれよたきのそば　(荻原)

三九二　二度となるまい馬子さのかゝに　朝も疾うから立ち暮す

三九三　ばぐらうする氣か四五丁も先に　鈴や鳴輪の音がする

三九四　馬方やめれば手に職持たぬ　お餘りないかとかどに立つ
三九五　嫌になります馬方かせぎ　馬の手綱で日を暮す
三九六　西は追分東は關所　せめて峠の茶屋までも
三九七　碓氷峠の權現様は　わしのためなら守り神
三九八　追分一丁二丁三丁四丁ある中で　中の三丁がまゝならぬ
三九九　信州追分にとまらぬ客は　風に吹かれて死ねばよい
四〇〇　追分一丁二丁三丁四丁五丁内の宿で　ほろと泣いたがいつ忘る
四〇一　追分呑掛この三宿へ　宿らぢや峠で死ねどまゝ
四〇二　追分の掛行燈に　錢無しやくるなと書いてある
四〇三　洗馬(地名)の追分本山(地名)甚句　日出(地名)鹽松坂まゝならぬ
四〇四　一つ瀬下つて風越(地名)をこせば　松が見えます二本松（鹽）

木遣唄

四〇五　人足手足を大事に頼むぞ—
四〇六　輕くみなとへ着く様に頼むぞ—
四〇七　やるぞ　やると言うたらやるわいな—
四〇八　おんほこいせ—〳〵　嫁の屁ですうとこいせ—
四〇九　おんぼいさいて來い　もう五分さいて來い
四一〇　さいて來たさいて來た　銀の簪さいて來た
四一一　エーヨイトショウ（合唱）エーヨイトショウ
　　エー重たいね　ヨイトショウ
　　皆様が　ヨイトショウ
　　エー力をな—　ヨイトショウ

木遣唄

エー揃えてねー　ヨイトショウ
エー頼むぞよー　ヨイトショウ
エー手強くもー　ヨイトショウ
エー抉じたてゝー　エーヨイトショウ
エー頼むぞよー　エーヨイトショウ

四一二 今日の材木は山の神材木　人足大事に後へ三尺
四一三 一のだいもちや山の神のだいもち　後へ三尺頼むぞ
四一四 引けよ若い衆今一引きよ　峠の辨慶がお茶で待つ
四一五 若い衆力出せ　若い女衆が見て御座る
四一六 元締様の小娘が　銀の簪さいて來た
四一七 小石につまづいて　富士の山をばとび越えたとさー　よーいとしよう
四一八 婆さいんどにやおさつがないぞへ　晩にや菜つ葉の味噌汁だ
四一九 筏のり様たもとが濡れる　かけてやりたや玉襷
四二〇 わしの殿御は初山登り　頼みますぞへ山の神
四二一 日雇と名がたちや代人日雇も　川に立つせいか水くさい
四二二 日雇さよいとて惚れるな女子　後へ殘るは草鞋切れ
四二三 日雇だ日雇だと悪くは言ふな　日雇がなければ木は出ない
四二四 御山の神様の寶木を　材にもらつて引くぞいな
四二五 上を見てもきりがない　下を見てもきりがない　あつたら　南瓜のほぞが落ちたぞ
や
四二六 阿寺（地名）の山から猿が出て　お寺の山へと腰をかけ野尻（地名）の古屋へ宿をとる（野尻）
四二七 よくも染めたよ船頭衆の浴衣　肩に大船裾に波碇といふ字は紋所　質においても流
りやせぬ
四二八 兎どのお前の日玉は何故丸い　三年前の凶年に　木樂子食べたで目が丸い
四二九 やるわいやると言うても何もなし　元締様の初夢に白い鼠を夢に見た　小判小つぶ
を食はへ込んだ

木遣唄

四三〇　元締様の初夢によい〳〵　三階松を夢に見たよい〳〵　一の枝には金がなるよい
〳〵　二の枝には錢がなるよい〳〵　三の枝には小判小つぼがなり下る　えんよい
としよう

四三一　井戸端水仙よいとこ咲いたぞ　やはやはやらんせ島田がこはれる　お花の朔日よい
とこしようと　百日病人で頭が上らんぞ　頭もちやげてあなたの方へ　もう五分さ
いたぞやれとこい　もう五分さいたぞやれとこい　（上松）

四三二　よーいとしよ　頼むぞえー　てこ様達者に頼むぞえ　挺が弱けりや大木が動かない
よ　あゝよーいとしよ　挺が強けりや大木が動くよ　皆様たのむぞよ

四三三　お十五六の嫁入りは　瓢箪ふくべの川流れ　あつちの藪へとつかゝり　こつちの藪
へとつかゝり　けつからぱくり〳〵と　浮いて出るわいなよーいとしよう　（黒川）

四三四　木を廻しこむ時
一　やれこれはい　やれこれどつこい
二　どつこいえんや　えんやらやれこら

四三五　かくり木遣
一　えんやらこらしよ　これはいなよう
二　どつこいしよ　おんーはさーで

四三六　縦引木遣
一　よいさあーよーい　やーれこれは　よーいんやさーで
二　よーんやさーで　やーれえよーんやさーで

四三七　あの姉さんをあれごらん　顔は四角で色白で　心はむかふでえんやんさ

四三八　明神様の雞は親孝行となきまする　親は大事でえんやんさ　うらからもとまでお頼
みだ　よいとこしよトえ　末はとこ松えんやんさ　（平澤）

四三九　西行法師と言ふ人は　西へ行くべき筈だのに　何故に東へ來るだぞい　よいとこ西
行へ

四四〇　忠臣藏綱手は四十七人で　えんや〳〵と引く聲は　だいもちやおかるで乘つてゆく
ぞよ　もう一つなんよね　なんよ〳〵

四四一　坊主頭に餡をのせて　のるかのらぬかのせて見よ　もしやのつたるその時は　一度
　　に掛聲頼むぞよー

四四二　一は大黒二は恵比壽三に此の山元締は大きな俵をふんまへて勘定するわいな

四四三　元綱持つた力蒲さん挺子を持つたが定九郎で　材木おかるで　えんやらや

四四四　さいて來いさいて來い　來いにや來いだが藝者のこいは錢持つて來いだぞ

四四五　しかつり後押せ　お召の半てん言はでも買つてやる　嘘ばかりつかんせ　ほんまぢ
　　やぜ　（田立）

四四六　甲斐絹のはばきで善光寺詣りは豫算の外た

祝唄

座敷唄

四四七　高い山から谷底見ればノーイソレ　瓜や茄子の花ざかりノーハリハヨイヨイヨイ
　　（高い山）

四四八　此處のお家はめでたいお家　鶴が御門に巣をかけた

四四九　鶴が御門に何と言うてかけた　お家繁昌と言うてかけた

四五〇　今年や嬉しや思ふ事叶ふ　鶴が御門に巣をかけた

四五一　めでた〳〵が三つ重りて　鶴が御門に巣をかけた

四五二　めでた〳〵が三つ重りて　末のめでたが孫となる

四五三　今宵はめでたや思ふ事叶ふ　末は鶴亀五葉の松

四五四　めでた〳〵の若松様は　枝も榮える葉も茂る

四六五　めでたい座敷の眞中で　鶴と龜とが舞ひ遊ぶ
四六六　こゝのお背戸にや茗荷と蕗と　茗荷めでたや蕗繁昌
四六七　婆さどこへゆく三升樽下げて　嫁の在所へ孫抱きに
四六八　鶴は千年龜萬年　祝ひこめたよ末長く
四六九　めでたきものは大根種　花咲いて實がなりて俵かさなる（大根種）
四七〇　めでたきものはそばの種　花咲いておさまり三つの倉建つ
四七一　めでたきものは芋の種　葉が丸うて（廣うて）莖長うて孫子榮ゆる（子供數多し）
四七二　めでた若松浴衣に染めて　着せて參らしよ　伊勢樣へ
四七三　君が田と又わが田と並び　ひとつ田の水畦ならび（君が田）
四七四　君がよの時や手に鷹そへて　城をめぐるやわが城を
四七五　春のはじめに若菜を摘めば　露もやさしやぬれかゝる
四七六　竹の切株たまりし水は　すまず濁らず出ず入らず

嫁入唄

四七七　嫁の長持や輕さうで重い　重い筈だよ中見りや金だ
四七八　立場〳〵で酒さへのめば　大目さんとめ着た心地
四七九　一度定めてのり出すからにや　二度と歸らぬ帆かけ舟
四八〇　松の小枝にくるみを焚いて　待つに來るみのうれしさよ
四八一　婆さよろこべ今度の嫁は　一目千兩の花嫁だ
四八二　娘をやりて出て見れば　かさのはがほのかに見えつかくれつ
四八三　お前百までわしや九十九まで　共に白髮の生えるまで
四八四　家を出るときや涙で出たが　今ぢや吹きくる風もいや
四八五　嫁にゆくとて洗濯までしたが　臍が出臍で嫌はれた
四八六　ほい〳〵本陣だよ　問屋の前だよさしたよ〳〵

酒盛唄

四七七　さいた盃中見てあがれ　中は鶴亀五葉の松
四七八　酒はよいもの氣を勇まして　顏に五色の色がさす
四七九　酒はさんさつ二十五の菩薩　祝ひ納めておめでたい
四八〇　加賀の菊酒一杯まゐれ　こなた御馳走にとりよせた
四八一　酔うた〳〵五勺の酒に　一合飲んだらゆらの助
四八二　お前もあがれわしも飲む　この酒で命を長く諸共に
四八三　惠比壽大黑何しておそい　待つてゐるぞへ福の神
四八四　惠比壽大黑何しておぢやる　黃金襷で錢はかる
四八五　こゝの亭主はいつ來て見ても　心よささうで酒くれる（にこにこと）
四八六　こゝのかゝさはいつ來て見ても　惠比壽顏してにこにこと
四八七　飲めよ大黑騷げよ惠比壽　中でしやくとる福の神
四八八　のめどつきせぬ今宵の酒は　天の岩戸で湧く泉
四八九　盃臺に松据ゑて　松の小枝に鷹のせて　小鳥をとらせておさかなに　下戸も上戸も
　なみ〳〵と
四九〇　奥山の瀧に打たるゝあの岩さへも　いつほれるともなく深くなる
四九一　きりぎりす　あだな聲して人足とめて　まさか手を出しや逃げるだらう
四九二　墨染の袈裟や衣に身をやつせども　思ひ切る氣は更にない
四九三　猫ぢや〳〵とおつしやいますが　猫が下駄はいて杖ついてしぼりの浴衣で來るもの
　か（別所街道　黑川）
四九四　わしの寢間から姉さんのねまへ　あへの戸障子からかみや　おとつさんのおねまが
　なかよかろ
四九五　別所街道のなか池に　鴨が九つさゞゑが五つ白鷺三羽と鵜が七つ
四九六　おばこ心持や小池の蓮の葉の溜り水　少し濁ればころ〳〵と轉んでくる（おばこ

黒川）

四九七　おばこくるかと田浦のはしこまで出て見たら　螢の虫かなんぞがしやれてくる

四九八　いづみのしようがいやをならひたきやならへ　酒の二三升もつてごされ（しようがいや　黒川）

四九九　いづみのしようがいやの婆さは燒餅好きで　ゆふべ九つ今朝又七つ

五〇〇　一つ殘いてちやんぶくろへ入れて　更にのるとて落いたも知らず　誰か拾つたらおかしからう

五〇一　ひげはすつて來たか　ひげだとおつしやる　ひげはおやぢの口ひげよ（ひげ　黒川）

五〇二　伊勢の宇治橋内宮に外宮八十末社の宮めぐり　間の山ではお杉お玉や　島さんこんさん中のりさん　岩戸さんには道つゞき　二見ケ浦には朝熊山　おうむ石磯邊びくにだが大々神樂にこれなもし　やつてかんせ（神坂）

五〇三　わたしとおかあさと糸とる所へ　誰か知らぬがふみよちよいとなげて　おかあさおりよ見る　おりやおかあさ見る．見るにや見られぬさつとさの喧嘩　言ふにや言はれぬ嘔の喧嘩　立つにや立たれぬいざりの喧嘩　おれもその時やどうせづかと思つた

五〇四　一つ人目を忍ぶには　お前の心はよしの笠
二つ深草少々で　一夜も逢はずに別れ笠
三つ見もせぬ人なれど　深く思へば三度笠
四つ夜な〳〵かどに立つ　人がとがめりや隱れ笠
五ついつまで通うても　君の心は曇り笠
六つ無理酒しげられて　顏にちら〳〵江葉笠
七つ馴染のない客に　なじめ〳〵といふ字笠
八つ山城美濃尾張　國をへだて丶近江笠

五〇五　一は樣子のはじまりだ　二は又問屋の倉になる
三はお母さんの腹にある　皺はお婆さんの顏にある
五は又碁盤の上にある　六は茶碗の中にある

酒盛唄

七は私はおいてある　八はさかさに巣をかける
九は又互の胸にある　十は戸棚の隅にある

*立酒唄

五九六　高い山から谷底見れば　瓜や茄子の花ざかり

*物吉唄

五九七　舞ひこむ〳〵お金が舞ひこむ　はねるが如く　千代の祝の春駒なんど　夢に見てさへよいとや申す　年もよし世もよし蠶かひよし　美濃國の小野山口の　小野山口で求めた種は　さてもよい種いばらき種　三とこの種をよせて集めよ　よせて集めて買ひめろ女郎衆　かひめろ女郎衆にお渡しやれば　かひめろ女郎衆は受けとりまして　春の初の若葉かなんぞ　手にさへきり〻としたゝめこんで　十疊こぼんにそんよとのせて　右の目棚に三日三夜　左の目棚に三日三夜　兩方合はせて六日六夜六日六夜をあらため申す　あらため申さば　うくとめ申せ　三日に水くれ　四日にあふひ　五日にそんよとおである蠶　なんで掃くよう　はくべき羽は　空を千里宙舞ふ鳥は　八つの羽なみはおうかな羽なみ　これより南に光明山と　光明山とて山がござる　こいけ麓にひともり薄　一もり薄二もりすゝき　さんもりのもとにすんだる鳥は　雉のめんどりや　小とや申す　雉の雄鳥や　大とや申す　大と小との一の羽休め　一の羽やすめ二の羽やすめ　三なる羽を手でぬきとつて　一はけはけば　千兩が蠶　二はけはけば　二千兩が蠶　三はきはけば　三千余兩　三千余兩をひろまりたまひ　さればお蠶に何々進ぜう　これより南の高桑畑に　十七八のあねさん達が　綾の前掛錦の褌　蠶飼びくをば右手につけて　馬の方へとさいたる枝を　兩手合はせてやんはとひかけ　やんはとひかけ　ほんはとこいて　蠶がひのびくにやんはり入れて　家へ歸りて　だいもん長者　三條どかちか　宗近樣の打つた

る鮑丁で　さつくり〳〵きざみ　あの子にはらりこの子にばらり　あの子この子の
桑めす樣は三才駒のかひ込む樣に　みざゞぶ〳〵とおざゞぶ〳〵と　おふねのやす
みは難なく起きて　にはの休みはふきわくごとく　柴に上りてつくりし繭は　さて
もよい繭　金まらまゆで　もとさに似たり　かたさに似たり　かつら河原の　碁石
に似たり　美濃の國では絲とりや上手　尾張の國では機織りや上手
上手上手は寄り集りて　七日七夜に絲とりあげて　しゝや牡丹もみな織りこんで
大八車に山程つんで　十四の倉をゆるりとたてゝ　えんやらさいて引きこむなかば
あやの長者か錦の長者　聳飼ひ長者とお祝ひ申す

祭唄

*宮入唄

五〇八　今日の町の送りに　まむしなんぞはきりたつて　三郎〳〵金三郎　金よりつばさは
お宮のかしま　ちようさやぼうさや　（野尻）

五〇九　鳥じようの小馬には　錦じようの鞍をおき　轡の〳〵大轡駒にかまして〳〵　じい
ねんの　三郎〳〵金三郎　金よりつばさはお宮のかしま　ちやうさやぼうさや
（野尻）

*神送唄

五一〇　あゝ來年なんちやごさらんぞ　あゝ三百年の豊年ちや　（野尻）

遊唄

鳥追唄

五二一 あーはの鳥も　ほーほ
ひーえの鳥も　ほーほ　（神坂）

五二二 あはひえぼーぼ　鳥や來て食ふに　ほーほと追へよ　（神坂）

五二三 鳥追ひだ〳〵　太郎と次郎の鳥追ひだ　俺もちつたあ追つてやらう　ほんがらほい
〳〵　（貴川）

五二四 日本の鳥と唐土の鳥と渡らぬさきに　ほい〳〵

正月様

五二五 おん正〳〵お正月　おめでたい（松立つて竹立つて）松かざり竹かざり　喜ぶものはお子供衆　いやがる
ものはお年より（又は、旦那の嫁ひは大晦日）

*踊唄

五二六 木曾のナーナカノリサン　木曾の御嶽ナンチヤラホイ　夏でも寒いヨイヨイヨイ
（木曾節）

五二七 袷ばかりもやられはすまい　襦袢仕立て〻足袋添へて

五二八 心細いよ木曾路の旅は　笠に木の葉が舞ひか〻る

五二九 木曾の御嶽七尾（地名）の里に　麻を蒔いたが生えたやら

正月様、踊唄

五三〇　木曾の棧太田の渡（地名）　碓氷峠がなかよかろ
五三一　木曾へ木曾へと皆行きたがる　木曾にや木山があればこそ
五三二　木曾の奈良井（地名）かやご原流か　麥もまぜずにまゝを炊く
五三三　木曾の奈良井か藪原（地名）宿か　婿も取らずに孫を抱く
五三四　踊り踊るなら板の間で踊れ　板の拍子で手が揃ふ
五三五　三里笹山二里松林　嫁御よく來た五里の道
五三六　押せや押せ押せ下のせきまでも　押せばみなとが近くなる
五三七　木曾へ木曾へとつけ出す米は　伊那や高遠の涙米
五三八　木曾の深山に切る木はあれど　思ひ切る氣は更にない
五三九　お月や傾く夜はしんしんと　やかた館に雞が鳴く
五三〇　唄ひなされよ聲はりあげて　七つやかたに響くほど
五三一　踊りませうぞへ踊らせませうぞ　月の山端にかぎるまで
五三二　月は山端にかげれどまゝよ　踊りややむまい夜明まで

五三三　今の音頭はどなたでござる　かねの音がするりん〳〵と
五三四　かねのねがするこがねのねする　たまにや主さの聲もする
五三五　こゝで唄出しや向ふでつける　昔馴染か友達か
五三六　音頭とるなら宵から夜明け　一つ二つは誰もとる
五三七　踊る中にもお獅子がござる　お手を叩いて廻るばか
五三八　音頭とる人橋から落ちて　橋の下でも音頭とる
五三九　切れた切れたよ　音頭が切れた　腐り繩よりよく切れた
五四〇　叩ひなされよ唄よし樣よ　聲は惡くもつけてやる
五四一　唄の返しも二度まちやよいが　三度返せばくどくなる
五四二　踊らまいかよ　おらこれだけで　四角三角そばなりに
五四三　踊り踊るなら品よく踊れ　品のよい子を嫁にとる
五四四　踊りそめたら踊りたうてならぬ　この子ちととれ出て踊る
五四五　踊り踊りやこそお前のそばで　あいにや見るばか思ふばか

五五六 唄は唄へど心のおくは　こぼれますぞへ血の涙
五五七 心細さに出て山見れば　霧のかゝらぬ山はない
五五八 右に玉菊左に八重路　乗つてゆきたや仲乗りに
五五九 揃うた揃うたよ踊子が揃うた　稲の出穂よりやよく揃うた
五六〇 稲の出穂には出むらはあるが　おらの踊りにやむらはない
五五一 今度くるならもてきてたもれ　名古屋街道の銀杏の葉を
五五二 名古屋街道の銀杏の葉よりも　木曾の檜の思ひ葉を
五五三 女ながらもまさかの時にや　主に代りて玉襷
五五四 お前一人か連衆はないか　連衆あとから駕籠でくる
五五五 小野の瀬越(地名)滑川越へて　花の寝覚(地名)が近くなる
五五六 寝覚通ればそば食へ食へと　錢のない客見て通る
五五七 盆よ〳〵と待つ中や盆だ　盆は今宵と明日ばかり
五五八 盆よ〳〵と春から待ちて　情知らずの雨が降る

五五九 盆が來たさうでお寺の庭の　きりこ燈籠に火があかる
五六〇 盆の盆花色から白い　死んだ佛の花ぢやもの
五六一 盆は近よる紺屋は焼ける　盆の帷子白で着る
五六二 盆にやどざれよ祭にや來でも　死んだ佛も盆にやくる
五六三 踊らまいかよ今年の盆にや　腹に子は無しらくらくと
五六四 盆にどざらば鉈さいてどざれ　盆にや柳の枝おろす
五六五 盆が來たのにかへらぬ奴は　地佛金佛石佛
五六六 粋な姿よ踊子の姿　お盆野に咲く百合の花
五六七 わたしや唄好き念佛嫌ひ　死出の山路も唄で越す
五六八 踊り踊るならお寺の庭で　踊る片手で後生願ひ
五六九 盆にや坊様來るかも知れぬ　ゆふべ卵の夢を見た
五七〇 盆だ〳〵と春から待たる　盆が過ぎたら何待たる
五七一 五月さつきだ　七月盆だ　早く暮せよ六月を

五七二　死んで又來るお釋迦の水か　死んで見せます今此處で
五七三　踊らまいかよ十五夜樣にや　月の山端へかぎるまで
五七四　廣いお庭が一寸かりがした　今宵一夜にふみならせ
五七五　踊らまいかよ若宮樣で　四本柱を中にして
五七六　三村四村のより集りで　聲が初心で恥づかしや
五七七　西野末川（地名）どんびき踊り　一つとんでは目をさます
五七八　出せといつたとてめつたな唄だすな　こゝは中ノ町庄屋の門（肩組祭の唄　藪原）
五七九　庄屋の門でも遠慮はいらぬ　唄に遠慮がいるものか
五八〇　踊りをどるは今夜が限り　明日は錄持つて草刈りに
五八一　今の若さで踊らにや損だ　三十過ぎれば子が踊る
五八二　婆さ出て見ろ向ひの山で　猿が餅つく木のまたで
五八三　横手節やいくよもござる　わりや姉御の節よならへ（横手　中部山間地方）
五八四　おやま見よとてならやへ出たら　おやま出もせでかゝが出た（おやま　中部山間地方）
五八五　天草の城は強い樣で弱い　鍋島樣におとされた（天草　黑川）
五八六　天草踊りを踊りたきや踊れ　扇は部屋の棚にある
五八七　天の七夕おいとしよどざる　川をへだてゝ戀をめす（野尻江島　野尻）
五八八　なんぼ習うてもとより節ならぬ　せめて名古屋の節よならへ（とより節　黑澤）
五八九　須原（地名）ばねそはお十六ばねそ　足で九つオ、サ手で七つ（須原ばねそ　須原）
五九〇　須原ばねそを習ひたきやござれ　金の十百（とつ）兩ももてござれ
五九一　須原ばねそと江戸馬方は　下手につけてもかたぎやせぬ
五九二　宵にや來もせで今四つ夜中　どこへ忍びの戻りやら
五九三　どこへしのびのもどりちやないが　道が遠けりやおそくなる
五九四　ぎちり〳〵と鳴る戸を明けて　しのびこんだの嬉しさよ
五九五　忍び込んだでやれ嬉しやと　思や夜明けの鐘がなる
五九六　こゝは塩屋か塩屋の角か　娘目元がしほらしや
五九七　下ぢや上町へ上町ぢや下へ　こゝで落合ふ仲の町

五九八　下に妻持ち上町に住めば　秋の小柿で下懸し
五九九　上に妻持ち下町に住めば　破れ障子で上懸し
六〇〇　下げた刀の下げ緒にすがり　連れて行かんせ妾をも
六〇一　心せけども今この身でも　時節待つより外はない
六〇二　盆にあはなきや八幡祭り　それに逢はなきや地蔵祭り
六〇三　色でかためたこの仲の町　やぼで通るは義理知らず
六〇四　麻の中にも三度も寝たが　麻はよいもの軟かで
六〇五　雨が降りやこそ祭だ泊り　降らにや越すもの坂本へ
六〇六　秋は夜長だ十年前の　昔馴染を夢に見た
六〇七　案じられたり主案じたり　胸の安まる夜さはない
六〇八　畦の細道誰がふみわけた　ふみぢや名が立つ唄でしれ
六〇九　あなた正宗わしや錆刀　あなた切れてもわしや切れぬ
六一〇　雨はさんざと降りてもやむが　たてし浮名はいつやむか
六一一　あなた一人と定めたからにや　他の男にや目をかけぬ
六一二　あいと返事をして見たけれど　愛想づかしを待つてゐる
六一三　あいた目で見て氣をもむよりは　一層目くらがましかいな
六一四　逢うた夕顔うれしいけれど　別れ朝顔袖に露
六一五　姉と妹に紫着せて　どちが姉やら妹やら
六一六　扇投げたにとゞいたか娘　折目要目に唄書いた
六一七　明日の天氣と扇の模様　あけて見なけりやわからない
六一八　暑い寒いはそりや氣の持ち様　思やかじかも川に住む
六一九　あの娘よい娘たぼた餅顔で　きな粉つけたらなほよかろ
六二〇　逢ひも見もせにや忘れもせまい　雉も鳴かずばうたれまい
六二一　淺間山でも登れば下る　登つて下らぬ山はない
六二二　淺間山から鬼や出るぢや出る　足の裾から綿が出る
六二三　淺間山さま何故やけしやんす　裾に三宿持ちながら

六三四　會津殿様米澤狸柴田狐にだまされた
六三五　會津殿様鰯かしやこか　鯛に追はれて逃げてゆく
六三六　會津殿さにやりたいものは　白木三寶に九寸五分
六三七　岩に松さへ生えようとするに　添うて添はれぬ縁ぢやない
六三八　一分二分より三分は可愛い　しぶのある人尙可愛い
六三九　一夜寢てさへ縮緬五尺　二度とねたなら襦子の帶
六三〇　嫌でござるよ男がよくも　二番息子の宿無しは
六三一　色で命も何惜しからず　惚れりや三途の川を越す
六三二　色の黒いは憎くはないが　口の憎さやあの烏
六三三　妹背山なら互に思ふ　わたしや背山で世事知らず
六三四　いとし殿さにほたてを貰うた　しはい殿さだ二十四文
六三五　一夜ばかりに千夜のことを　言うて歸るか男だて
六三六　（わたしや十九で世は三月で）いつも月夜で八月頃で　殿は二十五で居ればよい
六三七　石の壁でも錠は七重でも　合圖しておけ出て逢はづ
六三八　いくらかくしても在の衆は知れる　絞りゆかたに黑い足袋
六三九　いくらかくしても町の衆は知れる　いざる横に抱き米買ひに
六四〇　今の若い衆は大根育ち　色は白いが水くさい
六四一　嫌と言うたかお前の器量で　嫌といふ様な器量ぢやない
六四二　言へば腹立つ言はねば知らぬ　こまりものだよこの娘
六四三　唄の下手なはきゝての損よ　唄ふ心はおもしろい
六四四　唄はうたひたし唄の數は知らず　ひとつ小唄を繰返す
六四五　唄の出所は本山日出鹽（地名）　つけて流せよ洗馬（地名）の町
六四六　唄は袂に千程あれど　色の混らぬ唄はない
六四七　憂いもつらいもなごとのとがだ　言はにやくれまいわが親も
六四八　憂いよつらいよ媼（地名）が谷は　笠に木の葉がまひかゝる
六四九　上を見りや又きりないけれど　下を見て咲け百合の花

六五〇　繪島かつらばしや蜘蛛のえの如く　風にゆられてゆら〳〵と
六五一　越後松坂ならひたきやどされ　諏訪の龜屋の奥座敷
六五二　お顔見たさに聲聞きたさに　もうし矢立が落ちまする
六五三　音頭とる人とりくたびれて　河原蓬が加勢に出る
六五四　落ちる榎の實はかぞすりやなるが　殿さ可愛いこと數ならぬ
六五五　お前様にははじめてお目に　一つあげます盃を
六五六　思ひ込んだに添はしておくれ　神も佛も親様も
六五七　思ひ込んだら三度の飯も　胸につかえて湯で流す
六五八　お前一人に聞くわしちやないと　言うてわたしが泣いてゐる
六五九　同じ町内軒並びでも　逢はにや千里も同じこと
六六〇　親は子ぢやとて訪ねもするが　親を訪ねる子はまれな
六六一　お前待てならわしや何年も　足の土台のくさるまで
六六二　五郎兵衛尺八吹かねどなるが　何時もその音がでばよかろ

六六三　親の枕元箱根の關所　通りぬけたの嬉しさよ
六六四　お月様の様なまん丸い顔の　色の小白い嬶ほしや
六六五　親も得心あれならよいと　わしもそれなら辛棒する
六六六　男だてぢやのたてひきぢやのと　言うて私を迷はせる
六六七　神に願かけ叶はぬならば　二十二夜様お立待ち
六六八　可愛がらんせ嫁こそ子だに　娘他國の人の嫁
六六九　鳥鳴く鳴く（地名）の森で（人名）出ろよと三聲鳴く
六七〇　鳥鳴きでも知れさうなものよ　あけくれあなたの事ばかり
六七一　通や名が立つ通はにやきれる　人目世間がなけりやよい
六七二　可愛い主さと土間吹く風は　ちよいと入れたいわが寢間に
六七三　髪は蝶まげ着物は四つ身　おいさ本裁ちだで氣をつけろ
六七四　髪を結つてくりよ島田にちやんと　人が好く様に惚れる様に
六七五　可愛けりやこそ憎さが增すで　可愛よない人にくゝない

六七六　勘當されても手に職持てば　又もとりつく事もある
六七七　木曾〳〵と來やれ　帶をときやれ　野でも山でも帶を解きやれ
六七八　來たぞ戸が鳴る　出て見りや風よ　迷や風にまでだまされる
六七九　切れた草鞋も粗末にやならぬ　元はお米の親ぢやもの
六八〇　切れておくれよ今はな〳〵と　互に未練のない樣に
六八一　切れてしまへばばらばら扇子　風の便りも更に無い
六八二　黑澤祭（地名）が三度もあれば　一度逢はでも二度は逢ふ（黑澤）
六八三　黑澤祭は尻つみ祭　おらも行きたや尻つみに
六八四　黑澤祭は尻つみ祭　迎へ來たそで又やめる
六八五　栗尾川（地名）筋藤澤（地名）かけて　色も黑いが目も赤い（把之澤）
六八六　くるか〳〵ときりこの窓を　あけて待つ夜の夜の長さ
六八七　今日の日もはや七つになるか　晩のしのびも近くなる
六八八　これがかうだとわけさへわかりや　横に車は押しはせぬ

六八九　心ゆきさへとどいてゐれば　逢ふは五年に一度でも
六九〇　五年思うて一度でこりた　嫌なあなたの鮫肌は
六九一　小池小川の鵜の鳥見たか　鮎を食はへて瀨を上る
六九二　今宵一夜は浦島太郎　あけてくやしや玉手箱
六九三　今宵忍ぶなら裏からおいで　東枕の窓の下
六九四　こゝは山中お醫者はないか　可愛い殿さを見殺しに
六九五　米のなる木で草鞋を作り　踏めば小判の跡がつく
六九六　來いと言はれてその行くよさは　足の輕さようれしさよ
六九七　越の岩花くらくもまはす　花の西又星あかり
六九八　心せけでも今この身では　時節待つより外はない
六九九　こぼれ松葉を手でかきよせて　主のおいでを焚いて待つ
七〇〇　此の世ばかりか未來が夫婦　晴れて抱き寢の草枕
七〇一　戀にこがれて鳴く虫よりは　なかぬ螢が身をこがす

七〇二　咲いてくやしや千本櫻　鳥も通はぬ山奥で
七〇三　咲けば散るよと咲かずにおけば　いつも蕾で葉のかげに
七〇四　酒を飲む人花なら蕾　今日もさけさけ明日もさけ
七〇五　さした盃受けなよ娘　心なくてはさしはせぬ
七〇六　佐倉宗五郎子別れよりも　主と別れは尙つらい
七〇七　櫻林でひるねをしたら　花の盛りを夢に見た
七〇八　さあさ皆様おつもりやいかゞ　とこいりばなしがおそくなる
七〇九　盃ほしさに言ふのぢやないが　盃や疊の模様ぢやない
七一〇　先で思はぬ戀路に迷ひ　一人が二人の苦勞する
七一一　しまは七しま八しまもあるが　主に着せたいしまはない
七一二　しめておかれよ夜はまだ夜中　あけりやお寺の鐘がなる
七一三　暫く逢はなきや姿も顏も　變るものかへ心まで
七一四　辛棒しやんせよ辛棒が大事　廻る車も心棒から

七一五　島田さへ見りやありやさうだ〳〵と　外に島田が無いぢやなし
七一六　時節待て待て三年目には　新木造りの新世帶
七一七　時節待て待て今こゝ五年　せめてこの子の五つまで
七一八　仕事するならきり〳〵しやんと　こゝは道端人が見る
七一九　姑小姑はそりやあたりまへ　せめて繼子のないとこへ
七二〇　白菅笠のやれるは惜しや　忍ばれつまの笠ぢやもの
七二一　信州木曾路も來て見りや平　道の小路のよい所
七二二　忍ぶこの身の手拭とても　月に着せたや頰かむり
七二三　好いた水仙好かれた柳　心石竹葉は紅葉
七二四　好いてはまれば泥田の水も　もめばかんぞの味がする
七二五　扇子投げたにとゞいたか娘　背は黑背かきつばた
七二六　せめて蝶々の片羽ほしや　思ふ主さに舞ひかゝる
七二七　蟬はないても暮六つ限り　螢可愛や夜明けまで

七三八　洗馬の町通りや二階で招く　殿さ合點ちや錢がない　（平澤）
七三九　洗馬の本山鳴いて通る烏　錢も持たずにかふかふと　（平澤）
七三〇　洗馬のひじ松日出鹽（地名）の直木　お江戸屏風の繪にござる　（平澤）
七三一　洗馬を出ぬけて四ッ谷の清水　飲んで思ひ出す塩尻（地名）を　（平澤）
七三二　洗馬の追分米本山甚句　日出塩松坂まゝならぬ　（平澤）
七三三　洗馬の仲町やおしよげの駒で　駒がいさめば花が散る　（平澤）
七三四　洗馬のお女郎は四れんに五れん　心くれんで買ひにくい　（平澤）
七三五　煎じつめたる番茶でさへも　人が水さしやうすくなる
七三六　たしか鳴いたと飛石づたい　幾度肌石にされたやら
七三七　誰か來たさうな垣根の外で　鳴いたこほろぎ音をとめた
七三八　高い山でも上れば下る　わたしやあなたの片のぼり
七三九　瀧に打たれて切れても見たが　一瀨流れて先で添ふ
七四〇　たとへ錦の風吹くとても　切れてくれるな凧の絲
七四一　抱いて寢てくりよ島田の中に　島田くづせば人の妻
七四二　ちよいと出るにもお召の着物　家ぢや茶飯もくひかねる
七四三　十三ばかりで恥づかしけれど　買うておくれよ水かねを
七四四　十九大厄孕むか死ぬか　いやだ死ぬこと孕みます
七四五　十九二十はあひ頃ね頃　情かけ頃忍び頃
七四六　十九とるかね二十四五とるか　嫌だ二十四五十九とる
七四七　月の出たのを夜明けと思ひ　主をかへして今悔し
七四八　月が出たなら忍んでおいで　軒場三尺いつも闇
七四九　月と一所に出るには出たが　月は山端にわしやこゝに
七五〇　月はほんのり山邊へ出たが　裏へ廻れば眞の闇
七五一　つけてくやしや十六かねを　つけなきや思ひもせまいもの
七五二　出たよ出た出たもろこし舟が　浪にゆられてゆさゆさと
七五三　鳥居峠（地名）が海ならよからう　可愛い殿さと舟で越す　（奈良非）

七五四　どんど〳〵と鳴る瀬で落ちぬ　洞の小川の瀬で落ちる
七五五　土手の蛙の鳴く聲聞けば　洗馬町通ひはやめられぬ　（平澤）
七五六　殿さ可愛い〻ことしのだの森の　落ちる榎の實の數よりも
七五七　鈍な野郎だに緞子の羽織　着てるふりよ見りや尙鈍だ
七五八　殿は燈心百姓は油　しぼりとられる燈心に
七五九　殿さ道端に蓮華と咲きやる　おらもまけまい桔梗と咲く
七六〇　とんと叩いて裏門あけて　忍びこんだの嬉しさよ
七六一　奈良井河原（地名）で晝寢をしたら　會ひに來いとの夢を見た
七六二　七つ八つからいろはを覺え　はの字忘れていろばかり
七六三　なんぢやかぢやとてさてやかましや　人のせぬことしたぢやなし
七六四　泣いてくれるな別れぢやないに　今度別れにや泣いてくりよ
七六五　西も東も南もおいや　わしを思はばきたがよい
七六六　西野（地名）見た見た　大込（地名）も越（地名）も　奥の小西（地名）も高坪（地名）も　（西野）

七六七　二番目でも三番目でも　田地家督は腕にある
七六八　二十四文も只一文も　只の他人が誰くれる
七六九　主の心と御岳山の　峯の氷はいつとける
七七〇　主さお江戸で紫よしぼる　わたしや田舍で袖しぼる
七七一　主は今頃起きてか寢てか　思ひ出してか忘れてか
七七二　主と松風身にしみじみと　更けて淋しや蟲の聲
七七三　主は池水どうして見ても　淺い深いの底知れぬ
七七四　寢ては考へ起きては思案　胸の納まる時はない
七七五　能登の輪島で竹伐る音は　三里聞えて五里ひゞく
七七六　能登の輪島はさうめん所　空が曇ればならぬ職
七七七　花の江島は糸ならよからう　たぐりよせませうわが前へ
七七八　花は千咲くなる實は一つ　早く無駄花散らしたや
七七九　派手な櫻の一枝よりは　地味な松葉で末長く

七八〇　離れ〳〵の散雲さへも　よればくぜつの雨が降る
七八一　花程に愛情なけれどあれ見やしやんせ　姿やさしや川柳
七八二　春の初めに扇を拾つた　扇めでたや末廣だ
七八三　人に情と冬田の水は　末を思へばかけておけ
七八四　一人で來たかよ　あの桔梗ヶ原（地名）　すゝき尾花を道づれに
七八五　一つ出されよねどりのお女郎　わしもつけます下手ながら
七八六　藤澤山中萱中なれど　都まさりの女郎が住む（把之澤）
七八七　富士の裾野の一本すゝき　いつか穂に出て亂れあふ
七八八　文のやりとりや千本しても　逢はなきや戀路がうすくなる
七八九　文の上書や薄墨なれど　中にこいぢが書いてある
七九〇　降らば降らんせ　わしやぬれに來た　どうせ私はぬれ心
七九一　部屋の梅でもひらけば匂ふ　事はかくせば尚知れる
七九二　程もよささうな氣もありさうな　金のある樣な殿ほしや

七九三　惚れてゐりやこそ神田（地名）から通ふ　逢はで神田へ歸らりよか（平澤）
七九四　他にあるとは世間の噂　わたしや主より外にない
七九五　惚れてゐるせいか　じんかもえくぼ　足のちんばも品と見る
七九六　星の數程女子はあるが　私の思ふは只一人
七九七　松の葉の樣な緣ならほしや　枯れて落ちても二人連れ
七九八　松はこの世のあやかり者よ　枯れて落ちても二人連れ
七九九　待つがつらいか待たるゝわしが　家をしのんで出るつらさ
八〇〇　待てば添はれる身を持ちながら　せいて世間をせまくする
八〇一　負けて裸身で襦袢で寢たら　襦袢短し夜は長し
八〇二　まつとつけまい我が子の名をば　まつはういものつらいもの
八〇三　窓の障子にうつりし姿　筆がないのに月がかく
八〇四　松になりたや峠の松に　上り下りの手かけ松
八〇五　見たか聞いたか名古屋の城を　金の鯱雨ざらし

八〇六　水は下へと流れるけれど　水に言傳できはせぬ
八〇七　みの〻前垂れせんきのためだ　ふたの半とは氣は知れぬ
八〇八　未練ながらももう一度を　返り花でも咲かせたい
八〇九　見ては見ぬふり逢うてはつんと　他人顔すりや尙可愛い
八一〇　向ふの山見りや殿なつかしや　殿さ住ましやる山だもの
八一一　昔よ思へばくやしよてならぬ　ならぬさゝげの手をくれた
八一二　娘島田と新木の舟にや　人は見たがる乘りたがる
八一三　山は燒けても山鳥やたゝぬ　子程可愛いゝものはない
八一四　燒いた燒餅先からこげる　りんきやきもち手前から
八一五　ようさばかりは愛想がつきる　たまにやひるまもきておくれ
八一六　夜明烏と雞やにくい　可愛い主さの目をさます
八一七　よばえこばえは男の習ひ　よせた女子の恥となる
八一八　嫁にや貰はれ主さにや泣かれ　胸は八千代の玉椿

八一九　嫁をとりたら又出てうせた　親に盃二度さした
八二〇　嫁にゆくから世話しておくれ　姑小姑のないとこへ
八二一　わたしやあなたに十分惚れた　八分されても二分殘る
八二二　わしのこの身はどうでもよいが　主の顏さへたてりやよい
八二三　わしを思はゞ日かげの紅葉　うすくこくなく末長く
八二四　わたしや奥山一重の櫻　八重に咲く氣は更にない
八二五　わたしや石舟思ひで沈む　心ある人あげてくりよ
八二六　わしといかぬかお倉の背戸へ　忍び櫻の枝折りに
八二七　若い時なら立つ名もまゝよ　立てよわが名も君の名も
八二八　わしの願ひは五つの願ひ　二つ枕に三つぶとん
八二九　わしのぼんくら死にしにたてる　雨のもうらぬ倉はない
八三〇　わたしやあなたと二枚の屏風　離れまいとの蝶番
八三一　わしとあなたは羽織の紐よ　ちやんと結んで胸にある

八三二　わたしや十六さゝげの花よ　誰にもがせうか初なりを

八三三　譯がわからにや端唄をききやれ　端唄この世の利をわける

八三四　福助踊りをならひたきやござれ　金の四五兩ももてござれ（福助踊　山口）

八三五　金の四五兩ももてくるよりは　家でならひませうらくらくと

八三六　郡上の八幡出て來る時は　雨も降らぬに袖ぬらす（郡上の八幡　奈川）

八三七　昔馴染と八幡節は　捨てよと思へど捨てられぬ

八三八　八幡踊りが今身にしみた　前のこづまがうしろむく

八三九　前のこづまも一人ぢやむかぬ　あとのこづまがひきむける

八四〇　ゑさゝ踊りは足拍子手拍子　三拍手揃はにや踊られぬ（ゑさゝ　奈川）

八四一　おかめ踊りよ　おかめ十六さゝげの花よ　誰にもがせう初なりを

八四二　五尺いよこの手拭を　染めも染めたよ紫に　中にやよ菊ちよいと染めた（五尺手拭　踊）

八四三　主の癇癪氣のとり樣　駒は手綱よ船は舵　して見りやわたしが惡いのか

八四四　桃台に梅を切り接ぎ　根は何にても情愛うつれば花がさく

八四五　金のなる木はありやしやんすまい　辛棒する木に金がなる

八四六　人に從へ金にはしなへ　風にしなはぬ木は折れる

童詞

*子守唄

八四七　寢んねんころりよおころりよ　おらいの坊やはねんねしな
八四八　寢んねんよおころりよ　坊やはよい子だねんねしな　まだ夜が明けぬよい夢三つ
　よい子だなくなよねんねしな
八四九　お月様いくつ十三七つ　下りてまんまをまゐらつせ
八五〇　ねんねが御山の雉の子は泣いてはお鷹にとられるぞ
八五一　ねんねんようおころりよう　坊やはよい子だねんねしな　泣くとお化が食べにくる
　坊やはよい子だお泣きやるな
八五二　ねんねんよおころりよ　坊やがねんねしたーなら　何あげませう母さんのおつぱい
　たんとあげませう　お馬やおもちやをたんとやらう
八五三　坊やはよい子だねんねしな　この子可愛さ限りなし
　山の木の數栢の數　天へ上つて星の數
　沼津へ下れば千本松　千本松原小松原
　松葉の數よりまだ可愛い
八五四　ねんねこねんねこねんねこよ　お目めのさめるあしたには　紅葉は赤くなつてゐ
　やう
　ねんねこねんねこねんねこよ　ねんねこねんねこねんねこよ　おめゝのさめるあし
　たには　お宮詣りに參りませう　ねんねこねんねこねんねこよ
八五五　ねんねんよおころりよ　ねんねの子守はつらいもの　人には樂に思はれて　親にや
　叱られ　子にや泣かれ　數へかぞへてかどに立つ
八五六　ねんねんねこ町米屋町　米屋の横町遙る時　チュう〳〵ねずみがないてゐる　何の
　用かと問うたれば　大黒様のお使で　寢んねした子をお迎へに　坊やも早くねんね

して　大黒様へ参りませう

八五七　子守の様な楽な様なつらいことはない　乳房はなれりや泣くばかり　家へくりや旦那さんに叱られる　おかみさんにや横目でにらめられ　早くお正月くればよい　風呂敷づゝみに下駄さげて　旦那様左様ならお世話様　ちぼさま大事にしておくれ　戸間口出る時けつまづく

八五八　子守といふものつらいもの　人には楽に思はれて　雨風吹いても宿はなし朝から晩まで門に立ち　人の軒端で日を暮す　早う正月くればよい　風呂敷づゝみに下駄さげて　旦那様さいならお世話様　あね様さいならお世話様　ちぼ様大事にしておくれ　戸間口出る時けつしやぶれ

八五九　わし程因果なものはない　七つ八つから茶屋待ちに子守奉公をいたされて　そこの姉さんひどい人　はあ吹け火を吹け火鉢ふけ　朝から晩まで働かせ　しまひにやちやん着物着せ　そこで子守の思ふには　早くお正月くればよい　お正月が來たならば　風呂敷包を横に背負ひ　下駄を片手にぶらさげて　姉さん左様ならいとまごひ　こんなひどいとこもうこない

*遊ばせ唄

八六〇　ねんねんよねんねんよ　ねんねのお子守やどこへいつた　あの山越えて里へいつた
里の土産に何貰うた　でんでん太鼓に笙の笛　笙も太鼓もとつといて　ひつついて
ねんねしよ　ねんねしよ
ねんねんよねんねんよの所
ねんねんよおころりよ
ねんねんころりよおころりよ
でんでん太鼓に笙の笛の所
起上り小法師に犬張子
起上り小法師に彌次郎兵衛
赤いまんまにとゝそへてくれるでだまつてねてくれよ

遊ばせ唄

くれるに泣くなよ　なーくなよ
たゝいてきかせうにねんねしな
誰にくれよと貰うて來た坊やにくれようと貰うて來た
ねろてばねないかこの餓鬼やほい

八六一　ねんねんねんねんねんねんよう　ねんねのねーとるその留守に　赤いまんまを焚い
といて　坊やに三杯うち食はせう　後の殘りは乳母にくりよ

八六二　むかひの山のちんころはんまんだめんめがさーめぬか　おつぼにまんま入れてさ
ら〳〵あがれ

八六三　あつちの山から來る鳥も　こつちの山からゆく鳥も　おんどりめんどりつんばくら
羽が十六身が一つ　とうじらうと申します　一の子二の子五葉松柳柳の裏に　猫の
尻尾十に切つて　とゝこいつるくした

八六四　烏とんびどこへゆく　おすわ樣のお迎へに　何持つて行く　粕三合米二合　橋のつ
めでこぼいて　爪立つて拾つて　洗ひ場で洗つて　いすぎ場でいすいで　甘酒つく

つておいたれば　上の町の黑犬と下の町の赤犬と來てみんななめてしまつた　其の
後どうした　逃げていつてしまつた

八六五　うちの背戸のじしやの木に雀が三羽とまつて　一羽の雀の言ふ事にや　ゆんべ生れ
た雉の子が今朝はい起きてほろゝうち　蓑になるまい笠にする越後の町へ持つてた
ら　一貫五百に値がついた　一貫五百で賣るよりも　うらほの坊やの婿の笠

八六六　おらへの隣の千松は　長い刀をさしたがる
長い刀をさいたれば　京へ上つて舟漕いで
舟は何舟かんと舟　かんとの土產に何貰うた
一には香箱二に鏡　三にさらしの帷子を
誰にくれよと買うて來た　お母にくれよと買うて來た
お母にくれよと思うたに　お母は死んで今日七日
七日七日の弔ひに　赤い茶碗にお茶汲んで
白い茶碗にお湯汲んで　南無阿彌陀佛と申したら

遊ばせ唄

東の方で鳴く鳥と　西の方で鳴く鳥と
合はせてきけばお母さん　坊やはよい子だねんねしな

八六七　向ひの山を猿が三匹通る　先の猿は物知らず
後の猿も物知らず　眞中小猿が物知つて
一本折つては腰にさし　二本折つては腰にさし
三本目に日が暮れて　鳥屋へ泊らうか
鳥屋はいやいや　とんび屋へ泊らうか
とんび屋もいやいや　油屋へ泊つて
朝起きて見たら　美し女郎が黄金の盃手に持つて
一杯まゐらうか庄屋どの　二杯參らうか庄屋どの
おらほのさかなは　ひめぐり蛤あいのすし京ではやる赤團子

八六八　この子はよい子ぢやどこの子ぢや　問屋八兵衛の乙娘　なんとよい子ぢや京の子ぢ
や　京に育つて來た程に　親に十貫子に五貫　せめておばゞに四十五貫　四十五貫
は何にする　お米を買うて船に積み　船は銀(しろがね)櫓は黄金　さあさおせおせ都まで
都もどりに何貰うた一に笄(かうがい)二に鏡三に更紗の帶貰うた　くれてくだされおばゞ様
くれてやらうと思へども　帶に短し襷に長し　山田藥師の鐘の緒に

八六九　おらへの子供はよい子供　隣の子供もよい子供　木綿かつぱに茶の小袖　野にも
山にもねて見たが　松葉にさゝれて目がさめた　こゝはどこかと思つたら　かまが
かへどの森の下　森につゞいて信の町で　信の町で何買うた　一に重箱二に硯　三
にさらさの帶買うた　だれにくれよと買うて來た　お万死んで今日七日　それがう
そなら行つて見ろ　つちの葉どころに松三本　こつちの葉所に松三本　京都雀と田
舍の雀と　上つたり下つたり　ちよいとついた丸の内

*手毬唄

八七〇　伊勢の坊主と名古屋坊主と　たこを買つて來て棚に置いたら　猫が食はへて　猫を

遊ばせ唄、手毬唄

追ふとて　縁の柱で頭こつきん　なんまいだ

八七一　田中の天神様から　お布領が廻る　何と言うて廻る　明日は日もよし今日もよし
今月今晩隣の恵比壽講によばれて行つたら　鯛の吸物蒔繪のお椀で　箸はいん箸
一杯吸ひませう　二杯吸ひませう　三杯目にお手たゝき　四杯吸ひませう　五杯吸
ひませう　六杯吸ひませう　七杯吸ひませう　八杯吸ひませう　九杯吸ひませう
十杯吸ひませう　先づ〳〵一ぽんつきました　とんと一かんつきました

八七二　じんじう様からお札が廻る　何と言うて廻る　今日は日がよし　明日も日がよし
今日今晩隣の恵比壽講によばれて行つたら　雉の吸物蒔繪のお椀で　すゝらすゝら
と
先づ一杯吸ひませう　先づ二杯吸ひませう
先づ三杯吸ひませう　先づ四杯吸ひませう
先づ五杯吸ひませう　先づ六杯吸ひませう
先づ七杯吸ひませう　先づ八杯吸ひませう
先づ九杯吸ひませう　先づ十杯吸ひませう

八七三　先づ〳〵一本おかやしなされて　お城の士おん士衆を　お駕籠に一台　いちをかの
さいたかの笹岡のかんもとへ　一二三四五六七八九十（ひいふうみいよういつむうなゝやあこゝとう）　とん〳〵叩くは誰さんぢや
新町米屋のはつちやんだ　今頃こゝらへ何に來た　雪駄を買はふと買ひに來た　お
前の雪駄は何雪駄　私の雪駄は京雪駄さあ〳〵かへ〳〵せまいか

八七四　とんとん叩くは誰さんだ　新町米屋のはつちやんだ　今頃こゝらへ何にきた　雪駄
が代つてかへに來た　お前の雪駄は何せきだ　私のせきだは京雪駄　さあ〳〵かへ
〳〵せまいか

八七五　お城のさおん士衆が　お駕籠に一台一よからう　さいたからう　さかよからう　か
んもとへ　ひいふうみいようい　つむうなゝやあこゝとう　先づ〳〵一本おかしな
されて　（繰返す）

八七六　お城のさおん士衆が　お駕籠に一台一よからう　さいたからう　さかよからう　か
んもとへ　ひいふうみいようよいよい櫻に千本櫻　雀が三羽とまつて　一羽の雀は

鷹に追はれて　あれやぽん〳〵　これやぽん〳〵　ちよいとお鷹をかーくした　おやかーくした

八七六　ホウホケキョーや鶯や　たま〳〵都へ上るとて　梅の小枝で暫寢して　父さん母さん夢を見た　何夢見たか語らんせ　奥の奥のお座敷で　十七八の小娘が　金襴前掛あやだすき　やつ緒の雪駄をしめはいて　ほろり〳〵とおなきやるが　何が悲しゆてお泣きやるや　何も悲しゆはないけれど　血ぢやといはれて恥かいた　洗ひ川で洗つていすぎ川でいすいで　糊つけ川で糊つけて　一番小屋へやつたれば　愛想がないとてうけとらん　二番小屋へやつたれば　愛想が荒いとてうけとらん　三番小屋へやつたれば　愛想があるとて受取つた（讀書）

八七七　ホーホケキョウ・や鶯や　たばたの都へ上る時　赤坂婆さの夢を見た　何と見て來た語りやんせ　四十四人が米を搗く　一番中の小娘は　錦襴前掛あやだすき　八つ緒の雪駄をしめはいてちやらり〳〵と行く中に　御殿の御山で足くぢて　いたや悲しやお婆様　何か藥はないかいな　夏降る雪を手にためて　油でねつて酢でといてそれをつけるとすぐなほる（平澤）

八七八　ホーホケキョーや鶯や　麓の都へ歸る時　梅の小枝で鶯が　父さん母さん夢を見た　語りやんせ　奥の奥の大山の　十七八の小娘が　金襴前掛あやたすき　八つ緒の雪駄をしめはいて　ちやらり〳〵とゆく時に　どこへゆかしやる山娘よこれより下は娘の墓　姉の墓へは松立てゝ　妹の墓へは笹立つて　松の小枝へ鈴かけて　南無阿彌陀佛と拜む時　西の方で鳴く鳥と東の方でなく鳥と　合はせて聞けばおせん鳥　おせんかうせんきじのせん　雉はなんぼに賣れました　四十四貫に賣れました　四十四貫のこの金を　父母に四貫に子に四貫　合はして婆さに　四十四貫　四十四貫（妻籠）

八七九　春と眺めて梅に鶯　ホ、ラホケキョで　明日は日本の三軒茶屋で琴や三味線　はりてん〳〵　手毬が上手　京で一番大阪で二番　嵯峨で三番　吉野で四番　五十五番花道出たら　寺の横道で引きとめられて　前で結んで後でしめた　しめたところへいろはと書いて　いろは何ちやと　糸屋の娘　姉は二十一妹は二十　二十くらべ

手毬唄

てひやたんこたん　ひやたんのお尻へ　やいとをすえて　あついやかん〳〵　かま
ぼこや　先は一かんかしました　（上松）

八〇　ホーホケキョーや鶯や　たばたの都へ上る時　梅の小枝に晝寢して　天竺寺から文が來た　何の文だと讀んで見ると　おちよにこい〳〵　鯉のぼり　おちよをやるには錢がいる　錢なら六文六十兩　金なら三貫三百十兩　（平澤）

八一　一二三四御山の景色は春と眺めて　梅に鶯ホーホケキョと唄ふなり　明日は祇園の二軒茶屋で零や三味線合はせ　てんてん手毬唄　唄の中山お七七七　お八八八　一九がくまので　ちよいと百ついて落した　おやおとした　先づ一かんつきました　とゝんと一かんつきました　（西野）

八二　一寸ついて渡いた　受取つた〳〵　一つでは乳首啣へて　二つでは乳首離いて　三つでは親の寢間を離れて　四つではより糸よりそめ　五つでは糸をとりそめ　六つでは麻機織りそめ　七つでは錦織りそめ　八つでは金襴織りそめ　九つでは嫁にし初めて　十で殿様と馴れそめて　十一で玉の様なるぼこを儲けて　世話にする世話にするスウトントント殿様　お年が若いとて御油斷なさんな　チチヤボンボン　一寸百ついて渡いた　御油斷なさんなの次

てんてんてんまり　お前の心とわたしの心とあふかあはぬか　あはして見たら　丁度一ぺんあひました

八三　向ふの山で蕨折るのは嫁か姑か娘か　娘ならこゝのかどへ立たして　金の三百兩を持たせて　それが嫌なら　天壽雲の萬壽雲のかねでのばしたつるはしを渡れ　じんきりこんきりこの棒はどこでぶたした　東街道でぶたした　東街道のお茶屋の娘はにほんてつきりきりこえて　一つでは乳首くはへて　二つでは乳首はなして　三つでは親の腰元はなれて　四つではよりこよりそめ　五つでは糸をとりそめ　六つでは麻機織りそめ　七つでは錦織りそめ　八つでは錦襴織りそめ　九つでは嫁にゆきそめ　十で殿さとねそめて　お十一で玉の様なるお子をもうけて　世話にせんとてすとんととんと　とんと殿さはお年が若いとて　油斷なさるなえこれ　清水の三本

の柳に一羽の雀が鷹に捕れて　尾がなく目がなく　あれやぽん〳〵　これやぽん〳〵
ちよつと百ついて渡いた　丁度一かんかせました　先づ〳〵一かんかせました

八八四　向ふのお山で光るは何ぢや　月か星か螢の虫か　月でもないが星でもないが　大納言様と中納信様と　お舟に召してお江戸へござる　お江戸へござればお伴を申す
お供は誰ぢや誰様ぢや　大脇山城左衞門様よ　後のお留守は甲斐様よ　甲斐様座敷で　どん〳〵おしやる　そりや又何ぢやとおまゝに問へば　お千代様のお嫁入　お嫁の道具は何ぢやいな　一かん小箱二かん手箱　三貫五百の油壺　油しんとろとろりとつけて　五尺のもとぎをとろりと卷いて　たけのじよ様よたけのじよ様よ　たけのじよ様はどちらでござる　あの竹藪の門の中　門の中にはお池がござる　むかしやあそこへ身を投げこんで　浮いては沈み浮いては沈み　朝草刈りの目をさます
朝草刈りの目をさます

五尺のもとぎをとろりと卷いての次

たけのじよう様よ〳〵　たけのじよう様は嬉しうないか　嬉しうないかは世間の言葉　世間の言葉はうれしからう　世間の言葉はうれしからう（妻籠）

八八五　向ひの山で光るは何か　月か星か螢の虫か　星でもないが月でもないが　大納言様と中納言様とお舟に召してお江戸へござる　お江戸の城は高いお城　一段上り二段上り　三段上つて南を見れば　よい子よい子が三人通る　一によい子が糸屋の娘
二によい子が二の屋の娘　三によい子が三の屋の娘　三の屋の娘はだてしやぢやないか　大巾帶を腰うち卷いて　白縮緬の襷をかけて　黒縮緬の前掛かけて　大川端へ塩水汲みに　波にか潮にか打たれやせんか　波にも潮にも打たれやせんが　御伊勢參りの道連れに　道は細道小藪は茂し　しげき小藪が目にかゝる　目にかゝる

八八六　おかん様とおらめ様を　お手引合はせて　おかさの前に〳〵　おかんに惚れてついてゆきたや高遠迄　高遠の城は高い城で　一段上り（以下八八五に同じ）

八八七　山の芝栗よくえんだ　えんでこぼれて拾はれて　茶屋の鍋でうでられて　こはれて買はれて食べられて　ちよいと一こついた丸の内（平澤）

八八八　天から降る孔雀の鳥は　渡つて行きたや名古屋の城へ名古屋の城から熊野の城へ熊

野の城は高い城で　一段上り二段上り三段上つて南を見れば　よい子よい子が三人通る　一によい子は糸屋の娘　二によい子は荷の屋の娘　三によい子は酒屋の娘

酒屋一番だてしやぢやないか　それ又その筈　だてしやの筈よ　一巾帶を腰うちまいて　二巾帶をじよろりと下げて　中町小路をじよろりとゆけば暖簾の下からあはいて招く　あはいて招いて何くれなさる　あかねの手拭ひろどの雪駄　とんとおこやへ投げなさる　ありや又何だこりや又何だ　せんだい坊に供をさせ　あとは野となり山となり　行くさきやれんげの花となり

酒屋の娘の次

酒屋一番大金持で五兩で帶買つて三兩でくけてくけめ〳〵に房々さげて　折目折目に折房下げて　ちやんと結んで小ぢやんと結ぶ先づ〳〵一かんかせました

酒屋一番大だてこきで一巾帶を青菜に染めて　これでよいかとお菊にとへば

ものも言はんが返事もせんが　腹が痛いか頭痛もせんか　腹に三月の子がござる子がござる　先は一かんつきました

八八九　京は室町いつ〳〵や様や　お名はじんたく治郎吉様や　一人娘におこまと言うて　そこでおこまはお伊勢へ參る　今年十七詣らぬ年よ　親の言ふ事耳にも入れず　親の金子を百兩ぬすみ　襟やたんぽにみな入れこんで　四月八日にちよろりと出かけ道は度々日が暮れました　こゝはどこだと馬子衆に聞けば　こゝは篠田の大森小森もちと下ればお茶屋がござる　茶屋の二軒目に宿屋がござる　宿やの縁側に腰うちかけて泊めておくれよ一晩とめて　一人旅衆はとめる事出來ぬ　月に三度のお布令が廻る　そこでおこまはほろ〳〵涙　さあさおとまりおとまりなされ　夜の夜中にお風呂をたいて　おこま一人をゆる〳〵入れて　おこの座敷に床とりねかし　しんは一つに手拭一つ　宿の亭主はやれ恐ろしや　かねの事なら明日までお待ち　明日は京都へ飛脚をたてゝ　馬で三だん車で一だん　愛宕様へは月參り〳〵　先づ〳〵一かんつきました

八九〇　向ふの山を猿が三匹通る　先の猿は物知らず　後の猿も物知らず　中の小猿が物知つて　さあさこれから花折りにゆかまいか　一本折つては腰にさし　二本折つては

振りかつぎ　三本目に日が暮れて　さあさこれから宿とりに　烏屋へ泊らうか　さゝやへ泊らうか　油屋へ泊つて　朝起きて見たら　お十七八の小娘が　下にはちん〳〵縮緬を　上には羽二重さやの帶　當世はやりの今帶を　當山結びに結び下げ

足袋は白足袋もみの紐　やつ緒の雪駄をしめはいて　ほろりほろりと泣きゐたる

父が戀しゆて泣かしやるか　母が戀しゆて泣かしやるか　父が戀しゆて泣きやせんが　母も戀しゆて泣きやせんが　大事の小袖に紅つけて　洗へどすゝげとまだおちぬ　表へ干せば人が見る　裏へ干せば殿が見る　おこたへ干せば赤くなる　廣間の座敷へ干いたなら　血だと言はれて恥かいた〳〵

八九一　今日は日もよしきたもよし　天神様の御縁日　參る道者は四十五人　四十五人のその中に　十七八の小娘が　下にはちん〳〵縮緬を　上には羽二重さやの帶　とうてん様の今織を　とう山結びに結び下げ　足袋は紫もみの紐　八つ緒の雪駄をしめはいて　ほろりほろりと泣かしやるか　母が戀しゆて泣かしやるが　何が戀しゆて泣かしやるか　父が戀しゆて泣かしやるか　母が戀しゆて泣かしやるか　父が戀しゆて泣きはせぬ　母が戀しゆて泣きはせぬ　小袖の小樓へ血がついて　洗へどすゝげどまだおちぬ　表へ干せば人が見る　裏へ干せば殿が見る　炬燵へ干せば赤くなる　窓へほせば煤がつく　奥の廣間へほいたなら　血ぢやといはれて恥をかいた　ゆふべ化粧したかんの紅〳〵

八九二　向ひの山で木を伐り下す　何にするとて木をきり下す　はたごにさい〳〵　ちきりにさい〳〵　十三姫子に機織らしよ　くだまき女郎衆はいくつでござる　年はかくさず七つでござる　それから下へは皆五つみな五つ

八九三　向ふ通るは助さぢやないか　鐵砲かいつで脇差さして　お舟の山へ雉ぶちに　こんにやくとぼいて　尻餅ついておいたやかなしやおぼこ樣　何をつけたらよくならづ夏降る雪を手にためて　油でねつて手にのせて　それをつけたらよくなほる

八九四　お大大事のお手毬樣を　紙でくるんでこよりでしめて　しめた所へいろはと書いて色を消してぽたんをつけて　おらの隣のお前さんに渡いた

八九五　うけとつたよ〳〵　今日今晩お雪が降りさうな　小雨も降りさうなちよいと百ついて渡いた

手毬唄

今日は十か二十か三十か四十か五十か六十か七十か八十か九十か九十九まさんおち
やんと合はせてちよいと百ついて渡いた

八九六　おゝ　うけとつた〳〵　今日今晩紙もいらず硯もいらず　お大大事なお手毬様を
おもみのふくさにおくるみ申して　錦紗の絲にきりつとしめて　しめた所はちよい
と花よ　あか紙づくしや　白紙づくしや　しつか〳〵と　おらの隣の…さんに渡い
た　（中部北部）

八九七　おゝうけとつた〳〵　姉妹大事のお手毬様　お上のふくさにおつゝみなされて　蝶
よ花よとお育て申して　おん紋づくしか　白紙づくしか　おらが隣の…さんにお渡
し申すに　確に〳〵うけとりめつしやれ　（南部）

八九八　お母さんに抱れて乳飲んで　毬買つておくれ　菓子買つておくれ　毬は買ひたし錢
はなし　赤い紙袋に猫入れて　ぽんとつきや　にやご〳〵しゆ〳〵

八九九　おけばやおけばや　お白粉けばや
べつたりけばつて　おはぐろつけて
おはぐろつけて　口紅さいて
口紅さいて　頬紅よさいて
頬紅よさいて　耳紅よさいて
耳紅よさいて　おぼこを出して
おぼこを出して　びんやり出して
びんやり出して　前髪出して
前髪出して　お櫛をさして
お櫛をさして　かつやまいつて
かつやまいつて　たけながかけて
一らく衣装の着物をつけて　腰には博多の丸帶よしめて　あつ板腰紐前にとしめて
紙の四折りよ　前にとはさみ　足袋はすか足袋　やつ緒の雪駄　兩手合はせて念珠
をばかけて　二の門越えて　寺々參り　不動様にと御立願かけて　お手つけ賴むぞ
彌陀如來

手毬唄

九〇〇　孝行者では中村の　中村名主のをと娘
年は十八名はおせん　おせんの友達四十九人
四十九人の友達が　けさもさもさも奥山へ
佛の信心菊の花　おんどらどら〳〵どらねこさん
小間物店でもはじめようか一二三四五六七八九十　天から降つたお芋屋さん　お芋
は一升いくらだね　二十四文　もうちつとまからかちやからかほい　お前の事なら
まけてやる　頭を切られたたうね芋　尻尾を切られたじやが芋　隣の婆さんちよつ
とおいで　お芋のころりでお茶上れ　お茶も紅茶も飲みたくない

九〇一　天から落ちたお芋屋さん　お芋は一升いくらだね　二十四文　もうちつとまからか
まけとくれ　お前のことならまけてやる　天からおちたお芋屋さん　お芋のころり
でお茶上れ　ひいふうみいよういつむうなゝやあこゝとう

九〇二　天から降つたお芋屋さん　お芋は一升いくらです　二十四文　もうちつとまからか
すからかぽん　まな板庖丁とり出して　頭を切られたとうね芋　尻尾切られたとう
ね芋

九〇三　おん正おん正正月は　おめでたい松かざり竹かざり　いやがる者はお年より　よろ
こぶ者はお子供衆　旦那のきらひは大晦日　一夜あければ元日で　お茶持つて來い
酒持つて來い　吸物なんぞははや持つて來い　さあさおいとまつかまつる　ひーぢ
やふ　みーぢやよ　いつぢやむ　なーぢやや　こゝで申せばまつだのしくよ　酒屋
酒屋と二三軒ござる　中の酒屋へちよいとよつて見れば　奥ぢや三味線　茶の間ぢ
や　胡弓　お台所ぢや毬蹴やる　毬蹴やる　先づ一ぽんしよ

九〇四　一人娘はひとぢやくで　二人娘はふたぢやくで　三人目は女郎姫で　名古屋の小町
に貰はれて　さあ〳〵これから針仕事　縫つたりはつたりしたけれど　帶のたち方
忘れた　教へて下さい姑様　教へてやることたよいけれど　そんな事ぢや覺はらぬ
先づ〳〵一かんかせました

九〇五　十わたいた　二十わたいた　三十わたいた　四十わたいた　五十わたいた　六十わ
たいた　七十わたいた　八十わたいた　九十わたいた　丁度ちよう百わたいた（繰

手毬唄

返し）丁度二百わたいた

九〇六　いづ〳〵のいづくまの番頭さん　木綿は一反いくらだね　三百三十三匁　ちよいと
まけぬかちやからかほい　お前の事ならまけてやる　ひーふーみーよう　よい〳〵
吉野の千本櫻に　よさこい雀が三羽とまつた　一羽の雀は婿入仕度で　一羽の雀は
嫁入仕度で　一羽の雀はお鷹に追はれて　あれやぽん〳〵　これやぽん〳〵　ちよ
いとお袖でかーくした　おやかーくした
だん〳〵めぐり　ひとかい　ひとーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　ふたーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　みーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　よーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　いつゝ
だん〳〵めぐり　ひとかい　むーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　なゝつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　やーつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　こゝのつ
だん〳〵めぐり　ひとかい　とう

九〇七　此處からかうせば鎌倉街道　鎌倉街道に紅屋がござる　紅きり絞の襷をかけて　ち
やん〳〵ころりと機織娘　機織娘はいくつでござる　姉は二十一妹は二十　妹ほし
さに御立願かけて　伊勢へ七度熊野へ八度　愛宕様へは月參り

九〇八　此處からかうせば岡崎街道　岡崎街道にやお茶屋がござる　お茶屋の娘は手柄ぢや
ないが　いかにも手柄いかにも手柄　大わた帽子でのりかけたのりかけた

九〇九　大黒様（金毘羅比様）といふ人は　一に俵を踏んまへて
二でにつこり笑つて　三で盃さしあげて
四つ世の中よい様に　五つ泉の湧く様（出雲の若草比売）に
六つ無病息災に　七つ何事ない様に
八つ屋敷を廣めて　九つこ倉を建て並べ

十でとてんとおさまつた

十の所

十で殿様目がさめた　十でとつくりおさまつた

九一〇　裏のおばさん焼餅好きで　隣へよばれて十三食べて　一つ殘して袂に入れて　馬に乘らんとすとんとおとし　馬はけしやげる　雀にくれよ　雀いや〳〵烏にくれよ

烏かあ〳〵みんな食べた　みんなたべた　先づ一本かしやした　それとーん

九一一　耳つりはつり落すとお耳を引かれます　……さの處へ渡いた　……さの處へ渡いた

……さん今晩留守だがな　明日の晩には歸るがな　絹絲三筋に針三本　しつかり渡すで受け取れよ

九一二　昨夜生れた龜の子は　今朝早う起きて池のすま　池の小供は皆知らず　片葉の紅葉の色に出る

九一三　どん〳〵一さま　どん〳〵二さま　どん〳〵三さま

どん〳〵四さま　どん〳〵五さま　どん〳〵六さま

どん〳〵七さま　どん〳〵八さま　どん〳〵九さま

どん〳〵一かんかせました

九一四　昨夜生れた龜の子は　今朝早くから起きて床のそば　床の子供は皆しらず　片葉の紅葉の色に出る

一さいまーでどん〳〵〳〵　二さいまーでどん〳〵〳〵

三さいまーでどん〳〵〳〵　四さいまーでどん〳〵〳〵

五さいまーでどん〳〵〳〵　六さいまーでどん〳〵〳〵

七さいまーでどん〳〵〳〵　八さいまーでどん〳〵〳〵

九さいまーでどん〳〵〳〵　十さいまーでどん〳〵〳〵

一は一つついて二こついて三こついて四こついて五こついて六こついて七こついて八こついて九こついて十こついて　隣の姉さん金よこせ

一もんめの手をたゝき　二もんめの手をたき〳〵

三もんめの手をたゝき　四もんめの手をたゝき

五もんめの手をたゝき　六もんめの手をたゝき
七もんめの手をたゝき　八もんめの手をたゝき
九もんめの手をたゝき　十もんめの手をたゝき
先づ〳〵一かんかせました

九一五　どん〳〵〳〵　一さまは　どん〳〵〳〵　二さまは　どん〳〵〳〵　三さまは
どん〳〵〳〵　四さまは　どん〳〵〳〵　五さまは　どん〳〵〳〵　六さまは
どん〳〵〳〵　七さまは　どん〳〵〳〵　八さまは　どん〳〵〳〵　九さまは
九十や　くまのでいちやついておとして　一さま二さま三さま四さま五さま六さま
七さま八さま九さま　九十や　くまのでおとしておやさば　ひーものやー〳〵　こ
れよりひーものおひーもの　ちうよりちうべの娘は娘一人に婿三人　又もめとれた
ら士を　俺が死んだらそのあとを　げんない坊主にかつがせて　糸屋の娘に供をさ
せ　後は何となる山となる　いくさかれんげの花となる外でにかゝりしいしうさん
いしうが一匁で手をたゝき　二匁で手を叩き　三匁で手を叩き　四匁で手を叩き
五匁で手を叩き　六匁で手を叩き　七匁で手を叩き　八匁で手を叩き　九匁で手を
叩き　おやお手々をたゝいて　いしうさん　つきくらこくら　清水のはたでてんま
るついて　負けたら恥よ　勝つたら手柄

九一六　ゆふべ夢見た藥師の前で猫が嫁入せりや　いたちが仲人で　二十日鼠が五斗樽さげ
て裏の細道先づ一かんかせました

九一七　一の木二の木三の木櫻木のもとで雀子がちよこちよこ　あしたは旦那の稻刈りで
小束にひつからげて　ちよいと投げた

九一八　おらの小さい時や利口で器用で　橋の下では小石を拾ひ　砂で磨いてやすりにかけ
て　紙に包んでおこやへ投げた　おこや女郎衆は金だと思ひ　いけば餅つく酒買つ
て祝ふ　酒はもうはくしやくとりやお花　お花女郎衆は何故髪結はぬ　櫛がないか
油がないか　櫛は手箱に油は壺に　何が不足で髪結はぬ　（北部）

九一九　柏原源太元之助双六傳に打ちまけて　地藏峠で日が暮れて　松原峠で夜が明けた
夜明けの烏はほや〳〵〳〵で　姉さの方から文がくる　文の上書や何とよむ　おせ

んに來いと文が來る　おせんはやられぬお藤をやるよ　お藤やるには金がねる　金なら三文十三文　こそでの一つをたち着せて　お文持たせてやりませうか〳〵

九二〇　十三番二十三番三十三番五十三番六十三番七十三番八十三番九十三番　九十熊野で一かんついておとした　先づ〳〵一かんつきました（平澤）

九二一　名古屋本町通りて見れば大きな池に牡丹が咲いて　たんともさかぬが三輪咲いたあとの蕾はゆきき〻　さきの蕾はゆきき〻

九二二　とん〳〵隣のおぢさんは　朝はよ起きて藁を打つ　とん〳〵隣の鍛冶屋さん　朝はよ起きてかねを打つ　とん〳〵隣の米屋さん　朝はよ起きて米を打つ　とんとん打つたは　皆小判〳〵

九二三　向ふまち〳〵お若衆様よ、こんのかたびら木綿の帶よ　三重にまきつけ後でしめてしめた所へいろはと書いて　いろは友達伊勢〳〵詣る　七つ小女郎は八つ子を孕んで　生むにや生れずおろすにやおりず　四十七軒のてんまりよ卷いて　川に流して河原でとめて　川原の端で三味線ひけば　ひけば〳〵とべとつけ様よ　べとの女房はいろ〳〵様よ　色の黑いときや化粧してたもれ　化粧のいろはだん〳〵ござるゆふべくけたる十六帶を　買つたか貰つたか伊勢土產

九二四　こん〳〵めどり朝早く起きて　雨戸をあけてすみからすみまではき出して　ちいさんばあさん起きないか　今日のおかぞは何ぢやいな　きのこをまるめたまるめ餅ひいふうみいよういやむやなーやとうやとう

九二五　今の子供は油斷が出來ぬ　晒し手拭三尺三寸貰ひ　何を染めようと紺屋へゆけば三に下り藤四に獅子牡丹　五には撫子六つ紫　色よく染めて七つ南天八つ山吹九つとうべにちらりとそめて　十で殿樣葵御紋

九二六　こゝらの子供はべんこな子供　朝早う起きて朝髪結うて　一文紅をべつたりつけて二文雪駄をちやらりとはいて　お寺の玄關へ遊びにゆけば　お寺若衆に抱きとめられて　おかしやれはなしやれ帶や切れまする　帶の切れたは買うてもやるが　褌の切れたも結んでもやるが　緣の切れたはどもならん

七二七　向ふ横町のお稻荷樣へ　一錢あげてさつと拜んで　おさんの茶屋へ膝をかけたら

澁茶を出して　澁茶よこ〳〵　横目で見たら　きびの團子かお米の團子　先づ〳〵
一かんおかし申した

九三八　天の七夕おいとしゆうござる　年に一度は七夕様よ　忍びようさは吉日七日　雨と
涙はもろともに　どこへござるや御兄弟づれで　道は細道小藪はしげし　しげし小
藪が目にかゝる　目にはかゝらぬ　若い女子が目にかゝる

九三九　伊勢〳〵伊勢　新潟〳〵伊勢　新潟三河〳〵伊勢　新潟三河信州〳〵　伊勢新潟
河信州神戸武藏〳〵　伊勢新潟三河信州神戸武藏名古屋〳〵　伊勢新潟三河信州神
戸武藏名古屋函館〳〵　伊勢新潟三河信州神戸武藏名古屋函館九州〳〵　伊勢新潟
三河信州神戸武藏名古屋函館九州東京〳〵　先づ一かんかせました　ちよこせ

九三〇　今度見て來た身持の子守　女子どうちは高もりしやんこ　しやんこ〳〵と　だちや
りの男　絞り手拭どんすの羽織　雪駄ちやら〳〵横町通ふ　おかん出て見ろにこ
〳〵笑ふ　たけし子供を三人連れて　三人縁づきそのあととりは　江戸へ參りて十
一年年期　年期つとめて身をこしらへて　姉の處へちよいとより申す　姉は喜び涙
を流す　茶づけ上るかかへしよの酒か　酒も茶づけもおいやでござる　朧月夜でち
よろ〳〵ゆけば　小松のかげで　こちら〳〵と話をなさる　あれは誰だと友達にき
けば　あれはしほやのおかご様　丁度一かんつきました

九三一　おらへの隣の千松は　長い刀を差したがる　長い刀を差いたれば　京へ上りて舟こ
して　舟は何舟かんと舟　かんとの土産に何貰うた　一には香箱二に鏡三にさらし
の今帶を　誰にくれよと貰うて來た　お母さんにくれよと貰うて來た　お母さんに
死なれて今日七日　七日七日は二七日　母さんのお墓はどこそこよ　ずうつと下り
て小松原　松の小枝に念珠下げて　赤い茶碗に水くんで　白い英碗にお湯汲んで
母さんの墓へ持つてつた

九三二　むかひめいさんありめいさん　尾張名古屋のをと娘　ちらり〳〵とふりさき問屋へ
もらはれて　このさぬ問屋のどうする問屋ぢや　何をさせておかす　絹や紬や　錦
らんどんすと七重八重重ねて染めておくれる紺屋さん　そめてやるのはよいけれど
雨降りぼつたけ　雪降りぼつたけ　しんからたもとへ流れこむ〳〵

九三三　わたしのお手毬絹絲で飾り　つけばよごれる　とつとけばかびる　川へ流せば目にとまる

九三四　こゝはかういく　ごんごじじようの　しのびの寺で　じよろは九つ殿御は十　十でとてんと孕ませて　おすあひものは何々　お伊勢でからんだあひのすし　それさへもとめてくれるなら　殿御を生んでお目にかきよ　眞實その子が女子なら　こもにくるんでおなはでしめて　背戸の小川へとて流しよ　とてながしよ　女子の子ぢやとてさうなるものか　着せて食はせておそばにおいて　尾張の方に緣につきよ　緣につきよ　尾張のお方でお嫁といへば　千石一城取らせませう〳〵（川入）

九三五　てんまりつきのしめじようは　だいてきしめても物言はず　物は言はずは十二才八つで紅かねつけそめて十で熊野へ上らして　熊野の道で日がくれて　お寺でとまるも氣づかひで　酒屋でとまつて朝見れば　十七八の姉さんが　熊野の盃もち出して　一杯上れやお客さん　二杯上れや旦那さん　三杯上れや長左さん　高い所のとうきのこ低いところのしきのこ　桶の中のこうけのこ　先づ一本しよ

九三六　油立つた煮え立つた　煮えたかどうだか食べて見ろ　まだ煮えぬ　油立つた煮えたつた　煮えたかどうだか食べてみろ　もう煮えぬ　おひるのおかずにとつといてつうばなつばな一本拔いてはきいりきり二本ぬいてはきいりきり

九三七　えゝり樣のお嫁にて　嫁にいつたら出てえな　朝早う起きて四十九枚の戸をあけてなんく泣かして顏洗ひ　てん〳〵手拭で顏ふいて　ちやんちやんお釜でまゝを炊きけさのおかぞは何である　けし油にてつか味噌

九三八　やまべやまべを通りて見れば　下にせんしやく上にこしよし　こしよしや下るがわしや今上る　文をやらうか言づけしようか　文をやらうも言づけしようもこゝは

九三九　箱根の山里なれば　筆にことかく硯ももたぬ　やがて歸れと言うてたもれ

九四〇　諏訪の殿樣朝寢が好きで　四つにおめざめ　春ごぜん〳〵

てん〳〵手毬の手がそれて　どこからどこまでとんでつた　一つはねて　ぱちんとはねて　大根畑へころころと　さやの中からはじけた小豆粒　二つはねたぱちんとはねた　唐もろこしの赤い房に腰を下した小豆粒（田立）

九四一　京は北野の天神河原　小さい子供衆が青菜を冷す　ひやすところへ旦那衆が通り
あの子よい子だよいきりよの子だ　もうちつと大きさや妻にもするが　あまり小さ
くてどもならん　おやならん〳〵

九四二　一でよいのは糸屋の娘　二でよいのは庭師の娘
三でよいのは酒屋の娘　四でよいのは仕立屋の娘
五でよいのは呉服屋の娘　六でよいのはローソク屋の娘
七でよいのは質屋の娘　八でよいのは花屋の娘
九でよいのは藥屋の娘　十でよいのは豆腐屋の娘
とうとう一かんかしました

九四三　あいうえ親の言ひつけを　かきくけ子供に仲よく　さしすせそうのない様に　な
にぬねこはちやれたがる　はひふへほまれを第一に　まみむめものごとくちきかず
やいゆえよぶんの口きかず　らりるれろんのない様に　わゐうゑをかみへごくらくを

九四四　あいうえお早うお母さん　かきくけ今日はどこへゆく　さしすせそこまでお使に
たちつて友達よんでくる　なにぬね野原であそびませう　はひふへ本當に仲よく
まみむめもう夜歸ります　らりるれろばたの夕御飯　わゐうゑをかみへごくらくを
うんとよい夢ねて見ませう　先づ〳〵一かんかしました

九四五　一番始は一の宮　二は日光中禪寺（東照宮）
三は佐倉の宗五郎　四は信濃の善光寺
五つは出雲の大社　六つは村々鎭守様（天神さん）
七つは成田の不動様　八つ八幡の八幡様
九つ高野の弘法さん　十は東京淺草寺（心願寺）
十一越後のたけの坂　十二は浪子の墓參り
十三櫻の吉野山　十四は四國の金比羅さん
十五は五だいの天王寺　十六ロシヤの大戰爭
十七名古屋の名古屋城　十八濱邊の白兎
十九はくる〳〵風車　二十は二宮金次郎

九四六　一つ日屋取り其日がたより　二つ舟方大漁がたより
三つ味噌豆麹がたより　四つ夜道は提灯たより
五つお醫者は藥箱たより　六つ娘は針箱たより
七つ菜切り庖丁組たより　八つ山伏法羅貝たより
九つ小供衆兩親たより　十で殿様お馬がたより

九四七　一つとせ二方三川四州五戸六さし名古屋八九根九州東京　一がた日光三坂四國呉服
屋六しや七屋函館九州日本　先づ〳〵一かんつきました

九四八　一に橘二にかきつばた三に下り藤四つやのぼたんね五ついやまの千本櫻ね六つ紫色
よく染めてね七つ南天八つ山牡丹九つ小判がちーらちら十で殿様おさまつた

*御手玉唄

九四九　おさらい　お一つ〳〵〳〳〳〳おろして　おさらい　お二つ〳〵〳〳〳〳おろして
おさらい　お三つ〳〵〳〳〳〳おろして　おさらい　おみなのおさらい　お手しよ
み〳〳おろして　おさらい　おはさみ〳〳おろして　おさらい　かうづり〳〳おろ
して　おさらい　おひさか〳〳おほひざか　やちよなげ〳〳　おさらい　おてんぶ
し〳〳お手つきの　おさらい　おさらいのせかい〳〳下して　おさらい　ひるどぜ
ん　うんちよんきの　おさらい　お小袖おろして　おさらい　おにぎりおろして
おさらい　おてばたおろして　おてたゝきの　おさらい　小さな橋こぐれ　大きな
橋こぐれ　おさらいさらりこ　やつちやんとういつ　お一つ屋の娘さん　お二つ屋
の娘さん　お三つ屋の娘さん　お四つ屋の娘さん　お五つ屋の娘さん　お六つ屋の
娘さん　お七つ屋の娘さん　お八つ屋の娘さん　お九つ屋の娘さん　お十屋の娘さ
ん　お十一屋の娘さん　とてかく一しよう　おまけに二升　おまけに三升　どつこ
いしよ　お手つきのおさらい　おほかせ

九五〇　お一つお一つお一つ　おひと　お二つ〳〳〳〳　おふた　お三つ〳〳〳〳　おみつ
おみな　おみきりはらんで　おつてんぱらりん　じやうきなじやうきな　じやうき

んおんめ　あんめあんめあんめも　だやしこ〳〵　だいくびつき　ひざせんね
からせんね　ひざせんねからせんね　來年歸る　おさらい〳〵おさらし　おねがし
〳〵〳〵おんねも　おかへし〳〵〳〵〳〵もんも　もも出しばつたん　ばつたんば
つたん　もうももかーき　柿さんお早う〳〵　かーきも一俵　一俵二俵三俵四俵五
俵五俵もち俵　一俵もお目かし　おめかし〳〵おんも一ちよう　一ちようかして二
ちよう　二ちようかして三ちよう　三ちようかして四ちよう　四ちようかして五ち
よう　いつもたんとはあらりーたん〳〵〳〵太鼓豆太鼓　油のせいならぢゞばゝとつて
來いよ〳〵〳〵〳〵　たあた三つ　向ふの小山のちようせんちよばに　咲いたか開
いたかわしや知らぬ　ぢゞばゝのつからり〳〵〳〵　どうしてもかうしても　向ふ
の一人様に一本かせば一本かーす

九五一　お一つ〳〵一つ二つ　お二つ〳〵二つ三つ
お三つ〳〵三つ四つ　おゝみな　みなのつくり
のつくり〳〵のつくり小豆　小豆はかり　小豆もはかつた　小豆とぎ　小豆もとい
だ　お米はかり　お米もはかつた　お米搗き　お米もついた　お米とぎ　お米もと
いだ　お水流し　お水も流いた　ひとかもふたかもみつかもよつかもいつかもひー
とくれ　火焚き〳〵　火も焚いた　おき取り〳〵　おきも取つた　もーなし〳〵
もーもないた　お釜下し〳〵　お釜も下いた　お膳うつし〳〵　お膳もうついた
お膳出し〳〵　お膳も出いた　お手鹽つけ〳〵　手塩もつけた　箸をつけ〳〵　箸
もつけた　このまんま食べ〳〵　まんまも食べた　お膳あげ〳〵　お膳もあげた
お椀洗ひ〳〵　お椀も洗つた　お椀ふき〳〵　お椀もふいた　お椀ふせ〳〵　お椀
もふせた　この紅つけ〳〵　紅もつけた　鐵漿つけ〳〵　鐵漿もつけた　この機織
り〳〵　機も織つた　草刈り〳〵　草も刈つた　庭掃き〳〵　庭もはいた　ごみと
り〳〵　ごみもとつた　ごみすて〳〵　ごみもすてた　玉おくれ　有難うしよ　若
い衆働け　酒買つて呑ませるぞ　たん〳〵たけのしようのれんげの雨降り花が　咲
いたか散つたかわしやしらん　隣の姉さんに一ちよかした　二ちよかした　とつて
んしよ　おまねき

九五二　お一つおろして　おさらひ　お二つおろして　おさらひ　（以下お手玉の數によつて增す）

おみんな　おさらひ　おとしあげ〳〵おろして　おさらひ　おつかみ〳〵おろして
おさらひ　おつりんこ〳〵おろして　おさらひ　おひだり〳〵おろして　おさらひ
〳〵　やつちよめ〳〵およせて　おさらひ　おてつぶし〳〵おろして　おさらひ
お馬に乘りかへ〳〵　おさらひ　おかごで　ぎつちよ〳〵　おさらひ　しいる〳〵
おしいるさんで　おさらひ　おいし〳〵　おさらひ　おかま〳〵　おさらひ　おそ
で〳〵　おさらひ　おむね〳〵　おさらひ　小さいやぶこぐれ　大きい藪こぐれ
おさらひ　一二三四五六……二十六　おさらひ　王おとし　つみこ

九五三　お一つお二つお四つお五つになつてくよとんきり　お一さくら〳〵　お二さくら
〳〵　お三さくら〳〵　お四さくら〳〵　お五さくら〳〵とんきり　おきよく〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵おきよ〳〵〳〵とんきり　おしりぬけ〳〵〳〵とんきり　おぶつ
け〳〵〳〵〳〵とんきり　おく〻み〳〵〳〵〳〵とんきり　おかちん〳〵とんきり
お馬のおのりこ　とんきり〳〵

九五四　おさらひ　お一つ〳〵〳〵〳〵　おさらひ　お二つ〳〵〳〵　おさらひ　お三
つ〳〵〳〵〳〵　おさらひ　おみなの　おさらひ　お手上げ〳〵　おろして　おさ
らひ　おはさみ〳〵おろして　おさらひ　おちりんこのおさらひ　おひざか〳〵
おさらひ　から〳〵　おさらひ　おつてんぶし　すつてんつきの　おさらひ　おな
ぐり〳〵　ちよんきの　おさらひ　おさらひのうりこし　のうりこしちよんきの
おさらひ　おひざか　おさらひ　おそで　おさらひ　おかま　おさらひ　お手叩き
のおさらひ　こしぐれ　おさらひ　お〻かせ　お〻かせ

九五五　おつさらひ　お一つ〳〵〳〵〳〵おろして　おつさらひ　お二つ〳〵〳〵〳〵おろ
して　おつさらひ　お三つ〳〵〳〵〳〵おろして　おつさらひ　おみなで　おつさ
らひ　お手のせ〳〵おろして　おつさらひ　おはさみ〳〵おろして　おつさらひ
おちりんこ〳〵おろして　おつさらひ　おひだり〳〵　兩わけほい　おつさらひ
〳〵　やちよなげ〳〵　おつさらひ〳〵　でんでこむし〳〵　むしむし〳〵〳〵

おくそでおろして　おつさらひ　おにぎりおろして　おつさらひ　おてばたおろし
ておつさらひ　おてばた　おつさらひ〳〵〳〵　小さな橋こぐれ　おつさらひ〳〵
〳〵　大きな橋こぐれ　おつさらひ〳〵　どいつ一ぺん二へん三ぺん四へん五へん
六ぺん七へん八へん九へん十ぺん十一ぺん　おつさらひ〳〵〳〵　おかせ〳〵〳〵

九五六　おさらひ　お一つ〳〵〳〵〳〵　おさらひ　お二つ〳〵〳〵〳〵　おさらひ　お三
つ〳〵〳〵〳〵　おさらひ　お皆の　おさらひ　お手しよみ〳〵おろして　おさら
ひ　おはさみ〳〵おろして　おさらひ　かうづり〳〵おろして　おさらひ　おひざ
か〳〵　おーひざか　やちよなげ〳〵　おさらひ　おてんぶし〳〵　おてつきの
おさらひ　おさらひの世界〳〵おろして　おさらひ　ひるごぜんうんちよんきの
おさらひ　お小袖おろして　おさらひ　おにぎおろして　おさらひ　お手ばたおろ
して　お手叩きの　おさらひ　小さな橋こぐれ　大きな橋こぐれ　おさらひさらり
こやつちやんどういつ
お一つやのお娘さん　お二つやのお娘さん　お三つやのお娘さん

お四つやのお娘さん　お五つやのお娘さん　お六つやのお娘さん
お七つやのお娘さん　お八つやのお娘さん　お九つやのお娘さん
お十やのお娘さん　お十一やのお娘さん
とてかし一しよう　おまけに二しよう　おまけに三じよう　どつこいしよ　おてつ
きのおさらひ　おゝかせ

九五七　お一つお二つ二つ返して　おすてんぱらりん　くわんで〳〵　やんまい〳〵〳〵
おでしこ〳〵〳〵　りきさんまい〳〵　おさ入れ〳〵〳〵　おつこい〳〵〳〵竹年
ばた〳〵〳〵桃年　桃年ばた〳〵〳〵〳〵一俵（贄川）

九五八　おかやし〳〵　おふたあ〳〵　およつおづなげ　おぶなげ〳〵　一つぶつつけ二つ
ぶつつけ　おかまあ〳〵　お客〳〵　お橋〳〵　おゝよせふたよせみよせよよせ
一こおまねき

九五九　たん〳〵たけのいちようのれんげの雨降り花が　咲いたか散つたか　わしや知らん
隣の姉さに一ちよかした二ちよかした　とつてんしよ　ひいふうだ〳〵だいのやう

だ　ちんちんぐるめのちん　ちよこまめほい

九六〇　向ふの山で木を切り流す　何しよとて木を切り流す　はたごにさいてまねきにさい
て　十三小女郎であやおろし　綾も織るが綿も織るが　あすびのかけ方忘れたで
教へておくれ姑さん　教へてやるこたよいけれど　それを忘れてどもならん

九六一　世に元明の花嫁さん　裏の屋敷に坐らせて　錦紗縮緬ぬぎならぬ　何故かしく〳〵
泣いて居る　何故泣くのかと聞いたれば　えりとおくみを　そんな花嫁どもならん
で〻ゆけ〳〵　一かんです二かんです

九六二　妻女山は霧深し千曲の川は波荒し　はるかに聞ゆる物音は　さかまく波か強者か
昇る朝日の旗の手の　きらめく〳〵くる〳〵〳〵　廻る合圖のときの聲　合はせる
方もあら〻ふき　敵の言葉をかき亂す　川中島の戰は　語るもきくも勇ましや

九六三　いちよかつくりしよ　一ちよ二ちよ三ちよ四ちよ五ちよ六ちよ七ちよ八ちよ九ちよ
十ちよ

（附　錄）

童　言　葉

遊戯唄

*羽子突

一　正月といふものはよいものだ　氷の様な餅食つて　油の様な酒のんで　チンパンと羽子ついて

二　追羽子小羽子　人より高くひら〳〵まへば　こゝらで十よ　（讀書）

三　ひーやふーやみーやよーやいつ來て見ても七この帶を八の字にしめて　くるりと廻つてとつてんしよ

四　ひとやふたや見渡せば嫁御いつ來て見ても七こ・の帶を八の字にしめて　このかど通る

五　一の子二の子三の子櫻五葉松柳柳の下で化粧して通れ〳〵

六　お正月の神様はどこまでござつた　後の山の裾まで　お宮は何ぢや　栢かかち栗
　みかんかうじ桶　浮繪の羽子板にかねの羽のもくれんじゆチヤン〳〵と羽子ついて
七　ポン〳〵と羽子ついて　雪の中でも羽子ついて家の屋根を越えて　高く〳〵上れ
　ポン〳〵と羽子をつけ
八　一の子二の子三の子よその子いもの子村の子名古屋の子山の子この子東京の子
九　一つがあら〳〵二つが福壽草三つが蜜柑の木四つが萬の木五つが銀杏の木六つがむ
　くれんじゆ七つが南天の木八つ山吹の木九つ小梅の木十で德利さげてかーら〳〵

*おはじき

一〇　一じく二三四ちけ五ぼう六かご七草八重の九こゝのへの十（とう）
一一　一度にげた三かな屋の四助は五やて六まけて七かい八かい九にこまつて十び出した
一二　あつてもなくてもしらね　一度二度三度…

*いざやいざや

一三　櫻々彌生の空は　見渡す限り　いざや〳〵諸共に

*此處はどこの細道

一四　「こゝはどこの細道ぢや」「天神様の細道ぢや」「どうぞ通して下しやんせ」「御用のないもの通されぬ」「この子の七つのお祝ひに御札を納めに參ります」「行きにやよい〳〵歸りにや恐い〳〵」

凧あげ

一五　凧々あがれ　天まで上れ　字凧に繪凧
　いざやいざや、此處はどこの細道、凧あげ

一六　風々吹けよ　天まで吹けよ　凧々あがれ天までであがれ

一七　凧々あがれ　天まで上れ　おれの方の凧一番だよい〳〵

一八　凧々上れ　どんどと上れ　天まで上れ　西野（地名）の風と末川（地名）の風と吹いて　どんどと上れ天まで上れ（黒澤）

一九　とうじん〳〵風よこせ　風よこさんと山切るぞ

二〇　坊さん〳〵どこいくのお山のてつぺんぽ　さして

二一　お稲荷様の御名所　猿の睾丸やけたいに　東の風も西の風も　どんどと吹いてこい　どんどゝ吹いて来い

*青山土手から

二二　青山土手から　東を見ればね　見れば見る程涙がぽろ〳〵　こぼれた涙を　袂でふいて　ふいた袂を洗つてね　洗つた袂をしぼつてね　しぼつた袂をほしてね　ほした袂をたゝんでね　たゝんだ袂を簞笥へ入れてね　たんすへ入れてね　じやんけんぽん

二三　青山土手から（鳥がみ一つみつ赤い鳥がみ一つみつ）白い喋々がみ一つみつ　その後ハイカラさんが袴はいて靴はいて　すつぽこぽんのぽん

*てこてつたいな

二四　てこてつたいなーと　すとんともち上げて芋汁ごい〳〵〳〵　まくらいね　青山土手から東を見ればね　見ればね　お櫛をねお櫛をね　誰から貰うた　源太郎さんから貰うた　源太郎男は嫌だはね　ようてこおしやみさんが　涙をぽろりんぽろりん胸あたり〳〵　一けん下さいちようすけさん　蛇の目のからかさ三貫目　新式鐵砲ごう鐵砲　むね鐵砲ぇんやらや〳〵

二五　てこてつたいなーとすとんと持ち上げりや　いさゝかないぞめ　赤目の襟留　男立

派で歯がそつば
二六 てこてつたいなーとすとんともちこめ　男立派で金持で簞笥七棹さつさと持ちこめ
〳〵

一かけ二かけ

二七 一かけ二かけ三かけて四かけて五かけて橋かけて　橋の欄干腰をかけ　はるか向ふを眺むれば　十七八のねえさんが　花と線香手に持つて　姉さん姉さんどこいくねわたしは九州鹿兒島の　西郷隆盛の娘です　明治十年戰に　切腹なされた父上のお墓詣りに參ります　お墓の前で手を合はせ　南無阿彌陀佛と拜みます

草履かくし

二八 い〳〵ぞんぞりどこへかくした　おてまの下へかくした　つゞみをうてうてさんとこしよ　ほへと

二九 ぞんぞかくしてじようかくし　子供のぞんぞはめでたいぞんぞ　一ひろ二ひろ三ひろ櫻の根本の狐の涙ですつころこんのこん

三〇 じようりかくしじようりかくし　じよめんのものは　とつてんがへりのひーひやほい

三一 子供のじよんじよかくしは一かけ二かけ三かけ櫻木のもとで　雀子がぢやか〳〵（一の木二の木三の木又は一ぬけ二ぬけ三ぬけ）あした旦那の餅つきぢや餅つきぢや

三二 じようりかくしじようりかくし　じよもんにわらぐさ　おすみとおたまとねた樣な言葉のしなから　とうとんば　あゝとうとんば

三三 じようりかくしとうねんぼ　俵の鼠が米食つてちゆう　ちゆう〳〵〳〵　やれまたおれさきのけろ〳〵

三四 向ふの山を猿が三匹通る　先の猿は物知らず　後の猿も物知らず　眞中小猿が物知つて　子供衆子供衆　花折りにゆこまいか　何の花折りに　牡丹芍藥ぼけの花折り

に　一本折つて腰にさし　二本折つてふりかつぎ　三本目に日が暮れて　油屋へとびこんで　油一升ぬすんで　ももつかに背負はれて　あいべ〳〵もゝつか　一本橋の眞中で　鼻高親爺に逢つて　ゆるせはなせ千本讀んで聞かせう　大せんぼ小せんぼ　小せんぼの裏に　うつついじよんじよと　たあないじよんじよと　ぢゞ一本なたかせよ　ばゝ一本なたかせよ　何の木を切るんだ　梅の木を切るんだ　梅の木の下にうつついじよんじよと　たあないじよんじよと　名古屋の治兵衛さんに手を引かしよ

三五　下駄かくし　かはくれて　川原の鮠はくはいをうんで　小豆か豆かつゞらの子つゞらの子　誰か一人おぬけなさい

三六　足が冷える(痛いに)にちやつと見つけてくれ　(繰返す)

三七　おら足やないに早く見つけて下しやんせ

三八　おら足いたいな〳〵

*縄飛び

三九　おつぎおはいり　はいよろしゆ　今日はぢやんけんぽい　まけたお方はお逃げなさい

四〇　キューピーさんおはいり　おつちきりき〳〵おつぱつぱ　お次おはいり　はいよろしゆ　今日はぢやんけんぽん　まけたお方は出ておいで

四一　郵便屋さん走らんか　もうかれこれ十二時だ　おつちに　おつちに

四二　キューピーさんおはいり　おつちきりき〳〵おつぱつぱ　はいよろしゆ　ひいふうみいよういつむうなゝやあこゝとう

四三　お客さんおはいり　はいよろしゆ　はいつたら二人でぢやんけんぽん　まけたお方はおにげなさい

四四　一てき二てき三三が九　九九とひとねた　かたはの子　五がわいて〳〵五五二十五

四七　櫻々彌生の空は見渡す限り　いざや〳〵諸共に　地獄極樂閻魔の前でほめられた
閻魔の前で叱られた　お次おはいりはいよろしゆ　今日は　ぢやんけんぽい　まけ
たお方はさつさと出て頂戴

四八　大波小波どう〳〵と　一二三四五六

四九　大波小波まーやしまやしひーふーみーよういつむうなゝやあこゝとう

*ちゆう〳〵鼠

四八　ちゆう〳〵鼠の棚さがし　猫に追はれて恥かいた　俵の鼠は米食つて　ちゆう〳〵
〳〵　お母さん呼んでもお父さん呼んでも　きーつこなし　ずいずいずつころ
ばし　玉水こぼして　ちやつぼに追はれて　とつぴんしよろり　負けたらどんどこ
しよ

四九　ちゆう〳〵鼠の棚さがし　棚から落ちて踏み越えて　おまるに追はれて　さるまの
子〳〵

五〇　かいかいかくれんぼうにしゆうれんぼうに　お鏡山の鏡のとう〳〵用心棒に　ねえ
ちやんまつちやんいやほい

*つぼどの

五一　つぼどの〳〵　お彼岸詣りにゆこまいか　ゆくけれど　烏と言ふ黒鳥が　足をぼつ
つき目をぼつき　それでようまゐらぬわいな

中の中の

五二　中の中のこんぼ達や　何故せいが低いの　うしろにおるものだあれ

五三　中の中のこん坊主はなぜせいがひくい　青菜（あをのにさかなくて）にもまれてそれでせいがひくい　後に
つぼどの、中の中の

居るものだあれ

五四　中「見えた見えた」一同「どなたが見えたどなたのうしろ」中「〇〇さん」
一同「おてんとあたり」又は「おてんとちがひ」

*かごめかごめ

五五　かごめ〳〵籠の中の鳥はいつ〳〵でやる　八日の晩にずる〳〵でやす　うしろに居るものだあれ

五六　かごめ〳〵籠の中の鳥はいつ出て遊ぶ　夜中の頃に赤い提灯つけて　白い提灯つけて「まだかね　よしかね」「返事」

五七　かごめ〳〵かごの中の鳥はいついつたつな　夜明にたつよ　まだ夜はあけない　そいちやこゝ通らづ

五八　かごめ〳〵　かごの中の鳥は　朝日がさすか　夕日がさすか　ずん〳〵こーぐれ

五九　「お山のお山の行者さん　何でそんなにお泣きやるか」「小猿に鈴をぬすまれて」
「だまりやんせ〳〵　うしろのかたつぱさがしやんせ　月夜の晩に鈴になる」
（黒澤）

六〇　のせかんごしりかんご　今におちるぞぽつたりしよ

*大かん小かん

六一　大かん小かん　「〇〇つて子をほしや」
「どの子をほしや」　「饅頭に餅に」
「何をそへて育てるよ」　「赤いまんまにとゝそへて」
「饅頭目に毒餅や腹に大毒」　「田を半分つけて」
「何つけてくれるよ」　「山半分つけて」
「そんな事にやおいや」
大かん小かん

「そんな事にやおいや」

六二　大かん小かん

「子一人くれんか」　「ゆふべやつた子は」

「あがいて死んだ」　「何食はしておいた」

「饅頭や餅や」　「饅頭虫の毒餅熱の毒」

「どの子をほしや」　「〇〇さんほしや」

六三　大かん小かん

「どの子をほしな」　「そつからその子をほしな」

「何くれておくの」　「砂糖饅頭にあべか餅」

「饅頭目の毒餅腹に毒」　「錢やら金やら山程」

「錢いくら」　「一貫五百」

「それぢやくれ申す一里廻つてごされ」　「川あつて行けね」

「二里廻つてごされ」　「雨降つていけね何着て行くだ」

「蓑着てごされ」　「何かぶつてゆくだ」

「摺鉢かぶつてごされ」　「何杖についていくだ」

「すりこぎかついでごされ」　「何お土産に持つていくだ」

「ひいかの一はもつていけ」

六四　「子一人くれんか」　「ゆふべの子は」

「あがいて死んだ」　「何食はしておいた」

「鯛や蛤いか買つて食はした」　「そんなものは毒よ」

「かんで食はした」　「つばがつく」

「洗つて食はした」　「水氣がつく」

「乾いて食はした」　「こんぼしたかる」

「一夕」　「いや〳〵」

「二夕」　「いや〳〵」

「三夕」　「いや〳〵」

大かん小かん

「そんなら天保半かけ」　「どの子をほしの」
「〇〇をほしの」（三尾）

六五　大かど小かど

「どの子をほしや」　「そつからそつちの〇〇さをほしや」
「何くれておかひの」　「饅頭や餅や」
「饅頭目に毒餅や腹に大毒」
「一里廻つてどされ」　「山あつてゆかれん」
「二里廻つてどされ」　「川あつてゆかれん」
「三里廻つてどされ　二里目にくれてやる」

*七來い八來い

六六　「七來い八こい　何用でござる」

「子が一人ほしい」　「どの子をほしの」
「〇〇ちやんほしい」　「何食はしておきやる」
「一の膳でよばうか」　「それは毒だ」
「二の膳でよばうか」　「それも毒だ」
「三の膳でよばうか」　「それも毒だ」
「西の山へ行つて鯛とつて來てくはせうか」
「それもよからづ」　「何なつてゆこか」　「何なつておいで」

*おこんさ

六七　「山やのおこんさ山越えて川越えて遊びに行かねかね」
「今寢とるぞいし」
「まあ〳〵　お寢坊だね　山やのおこんさ山越えて川越えてあそびに行かねかね」
七來い八來い、おこんさ

「今ふとんたゝんどるぞいし」
「まあ〳〵お寝坊だね　山やのおこんさ山越えて川越えて遊びにゆかねかね」
「今顔洗つとるぞいし」
「まあ〳〵　お寝坊だね　山やのおこんさ山越えて川越えてあそびにゆかねかね」
「今白粉つけとるぞいし」
「まあ〳〵　おしやれだね　山やのおこんさ山越えて川越えて遊びに行かねかね」
「今紅つけとるぞいし」
「まあ〳〵おしやれだね　山やのおこんさ山越えて川越えてあそびに行かねかね」
ぐづ〳〵
「今の音は何の音だいし」
「芋とこんにやくの煮える音だぞいし　お椀と箸を持つておいで」
「おこんさは」
「今油揚買ひにいつたぞいし」

「おこんさ〳〵」
六八　橋こいて山こいて山々おかね
「さあいかねか」「今ねとる」
「まあ〳〵お寝坊ちやないかいな」
橋こいて山こいて山々おかね
「さあいかねか」「今顔洗つとる」
「まあ〳〵お寝坊ちやないかいな」
橋こいて山こいて山々おかね
「さあいかねか」「今白粉つけとる」
「まあ〳〵おしやれちやないかいな」
橋こいて山こいて山々おかね
「さあいかねか」「今豆腐買ひに行つた」
「豆腐や豆腐ありません」「草履買ひに行つた」

「草履や草履ありません」「お菓子買ひに行つた」
「お菓子やお菓子ありません」「蒟蒻買ひに行つた」
「蒟蒻や蒟蒻ありません」「お前とあそばう」
「こんな子何だ何だ」

六九　「山越えて川越えて山やのおこんさ遊びにおいで」
「今行くから待つといで」
「おらいのおこんさ赤い足袋はいてお前達は黒い足袋はいて　きめなんで仲よく遊んでおくれ」

*狐遊び

さ　「なあつみなつみ　今何時」
「今十一時半頃ですが十二時になると　橋の下から狐が出るからだまされぬやうに氣をつけておくれ」
「なあつみなつみ」
「私もよして」
「おつぽがはえとるでやあだ」
「切つてくるで」
「血が出るでやあだ」
「ふいてくるで」
「うみがでるでやあだ」
「それぢや私の前を通ると鐵せん棒でこくよ」
「そんならよした」
「なあつみなつみ」
「私お畫にいつてくるで」
「何のおかず」

「蛙の黒焼とへんびの黒焼」
「私にも見せて」
「えゝ」
「おばさんの後は蛙の様だ」
「私」
「いゝえ」
「おばさんのうしろはへんびの様だ」
「私」
「えゝ」

七一 「もし〳〵 あなたはどなたです」
「私は盲の狐です」
「今頃何しにきたのです」
「そこらの雞頂戴に」
「盲のことならあげませう 三べん廻つておいでなさい」
「それはまことに有難う そんならもらひに上りませう」「おいでなさい」一二三

*今年の牡丹

七二 今年の牡丹はよい牡丹 お耳をつねつてすつぽんぽん も一つつねつてすつぽんぽん

「私もいれてくれ」 「どこで遊ぶ」
「山で遊ぶ」 「山で遊ぶと山犬が出るでやあだ」
「川で遊ぶ」 「川へゆくと皮がむけるでやあだ」
「海へゆこ」 「海はうみが出るでやあだ」
「お畫を食べにいつてくる」
「お前のお畫のおかずなーに」

「蛇とまむし」　「生きてゐるか死んでゐるか」
「生きてゐる」　「どつち」
「へび」　「あなたの姿は蛇の様」
「わたし」　「いゝえ」
「わたし」　「いゝえ」
「わたし」　「さう」

七三　今年の牡丹はよい牡丹　耳かきすつぽん〳〵

「おれも入れんか」　「しつぽがあるからいやだ」
「切つてくるで」　「血がでるでいやだ」
「ふいてくるで」　「うみが出るでいやだ」
「そんならおらやの前を通つた時天秤棒でどうづくぞ」
「そいちやいれる」

*坊さん坊さん

七四　坊さん〳〵どこいくの　わたしは田圃へ稲かりに　わたしも一所につれさんせ　お前がくると邪魔になる　頭ぽん〳〵
なんだかん〳〵坊主糞坊主あとの小便だーれ

鬼ごつこ

七五　鬼さんこちら　手のなる方へ　あちらでたんたん　こちらでたんたん　つかまへら
坊さん坊さん、鬼ごつこ

れた人こそ鬼よ　あちらでたん〳〵　こちらでたんたん

六六　鬼さん(ゆちさん)こちら　手のなる方へ　雲か夜か　あちらでた〻〻　こちらでた〻〻　鬼さんこちら手のなる方へ

七七　鬼は〳〵鬼の來るまに豆でもいらぢや

七八　鬼の來ねいまに洗濯しませう　さぶ〳〵

七九　せんぎりぎつちよ〳〵　猿の後に誰がゐる

「〇〇ちやん」

「それはお猿の大間違ひ」

八〇　三夜〳〵の青い盃さしませう

「こゝらかね」

「いゝえまだ〳〵三夜〳〵の青い盃さしませう」

「こゝらかね」

「そこらでよからう」

かくれんぼ

八一　かくかくかくれんぼしよ　せい高入道茶碗におたふく　すつぺらぼん　だあれが鬼になつてもおこりつこなーし　おつとつと〳〵

八二　かゝやかくれんぼうや　すーかんぼうや　おかゞみや　かねの烏帽子で　でんでこでん　つちやこもちでどんしやんす　(三尾)

八三　かあかやかくれんぼ　河原の鮠が可愛いをうんで豆か小豆かつゞらの多いを一度に十度におやおぬけのしよ

八四　かあかくれんぼはよぼーのでんでこぼ　(黒川)

*坐り鬼

かくれんぼ、坐り鬼

八五　木にとつつく　通せんぼ（黒川）

*お駕籠ぎちぎち

八六　お駕籠ぎちぎちのりかごぎちぎち　今におとすか　まつさかさまにおとすか　も一つおまけにすつとゝんのとん

*米つき粟つき

八七　米つき粟つきお釋迦の水をどんどとくんでまつことかへせ

八八　米つき粟つきお釋迦の水を汲んでおくれよぎつちよん

八九　米つき粟つきぽつたりしよ

*お月様

九〇　お月様いくつ　十三七つ
　まだ年や若いな　赤いまんまにとゝそへて　さぶさぶ上りませう

九一　お月様觀音堂　おりてまんま上れ　まんまならいやいや　あんもなら三つくれ

九二　兎々何見てはねる　十五夜お月様見てはねる

尻まくり

九三　お尻まくりはやつた　おてつけはやつた

九四　お尻めくりは今はやる

九五　今日はばゞさの尻めくり

お月様、尻まくり

九六　今は〇〇の尻めくり（名前をいふ）

九七　今日は二十五日尻めくり

九八　尻まくり觀音堂觀音堂の坊さんは鼠に槍をかつがせていたちにくつわをおつぱめて
　　裏の山へ用心棒〳〵

にらめつこ

九九　だるまさん〳〵にらめつこしませう　笑ふとぬかすぞ　一二三
　　笑ふとだめよ　やーこいめ
　　しやべつてもいけね笑つてもいけね
　　笑ふとぬかす歯を出すとぬかす
　　笑ふとぬかす　アツプツプ

*上り目下り目

一〇〇　上り目下り目　くる〳〵廻つて猫の目
　　上り目下り目　くる〳〵廻つて狐の目
　　上り目下り目　くる〳〵廻つておかめの目

ぽこぺん

一〇一　ぽこぺん〳〵つゝきませう
　　つつつきませうか　ちよんだあれ

上り目下り目、ぽこぺん

手つまみ

一〇三　一がさいた二がさいた三がさいた四がさいた　五がさいた六がさいた七がさいた八がさいた　熊ん蜂さいた

一〇四　いけどの鳥とつまどの鳥と豆拾うて食うとて　けん〳〵ばた〳〵

種まき

一〇五　權兵衛さんが種蒔きや烏がほじくる　あゝすべらぼの〳〵

*べろべろ神

一〇六　べろべろかんじよう　へいかんじよう　屁をひつた方へつん向け

*指輪まはし

一〇七　さらばとさらかくして　靜かに渡す黄金の指輪鬼の知らぬまに　だあれ〳〵

一〇八　裏の門からおさよが涙をぽーろ〳〵　その又涙を小袖でふいてねふいてね　ふいた小袖を洗つてね洗つてね　洗つた小袖をほしてねほしてね　乾した小袖をたゝんでねたゝんでね　たゝんだ小袖を簞笥に入れてね入れてね　その又小袖を鼠ががーちやがちや　さらばと皿かくして　靜かに渡せ　黄金の指輪　鬼の知らぬ間に誰〳〵

羅漢さん

一〇九　羅漢さんが揃つたで　まはさうぢやないか　あ　えんやつさ　あ　えんやつさ